

二重心臟

夢野久作

青空文庫

不明の兇漢に

探偵劇王刺殺さる

孤児となった女優あま天川か呉羽わくれは哭ないて復讐を誓う

秘密を孕む怪悲劇

市内大森区山王××番地轟九蔵氏（四四）は帝都呉服橋電車通、
目貫の十字路に聳立する分離派式五層モダン建築、呉服橋劇
場の所有主、兼、日本最初の探偵恐怖劇興行者、兼、現代稀有の
邪妖劇名女優、天川あまかわくれは呉羽嬢の保護者として有名であつたが、昨
三日（昭和×年八月）ノルエー諾威公使館に於ける同国皇帝たんしん誕辰の祝
賀えん筵に個人の資格を以て列席後、大森山王××番地高台に建て
られたる同じく分離派風の自宅玄関、応接間に隣る自室に於て夜
半まで執務中、デスク前の廻転椅子の中で、平生同氏が机上にて
使用していた鋭利な英国製もろは双刃の紙切ナイフを以て、真正面より
心臓部を刺貫され絶命している事が、今朝十時頃に到つて発見さ
れた。急報により東京地方裁判所より貝原あたま検事、熱海予審判事、

警視庁の戸山第一搜索課長以下鑑識課員、大森署より司法主任綿わたぬき貫警部補以下警察医等十数名現げんじょう場に出張し取とりしらべ調を行つたが、発見者である同家小間使市田イチ子の報告により真先に死骸の傍へ駆付けた天川呉羽嬢が慟哭して復讐を誓つたにも拘わらず、犯人の目星容易に附かず。目下同邸を搜索本部として全力を挙げて調査中である。

因ちなみに轟九蔵氏の原籍地は神奈川県鎌倉町長谷二〇三となつてゐるが、同所附近で氏の前身を知つてゐる者は一人も居ない。大正十年頃より三四歳の娘（今の天川呉羽嬢、本名甘木三枝あまき（一九）本籍地静岡県磐田郡見付町×××番地）を連れて各地を遍歴したる後上京し、株式に手を出して忽ち巨万の富を作つた。

その中うちに三枝嬢が成長し、人も知る如き美人となつたのを手中の珠いづくと慈しみ、同嬢のために小規模ながら大森に現在の豪華な住宅を建ててやつて同居し、毎日のように同嬢を同伴して各種の興行物を見に行く中うちに、同氏自身、興行に興味を覚え、昭和五年の春、呉服橋劇場が不況に祟られて倒産したものを、同劇場の支配人笠りゆうけい圭之介氏に勧められるまにまに買取し、甘木三枝嬢こと女優天川呉羽をスターとする一座を組織し、且、新進探偵小説家江馬兆策氏を自宅の片隅に住まわせて、同氏に同劇場の脚本を一任し、巴里パリグラン・ギニョール座ならに倣い探偵趣味、怪奇趣味の芝居で当てるつもりであつたところ、当初の三四回の成功を見たのみで爾後一向に振わず、一部少数ファンの

支持を除き、一般人士には早くも飽かれてしまったらしい。そのため財産の大部分を喪い四苦八苦の状態に陥ったまま今回の兇変に遭ったもので、兇行の原因等の一切も同時に秘密の奥に封殺された形になっている。勿論、遺書等も無いらしく、劇場の権利等の遺産は多分天川呉羽嬢のものとなる模様であるが、気の毒にも同嬢は肉親の父親と同様の保護者を喪い、手も足も出ない天涯の孤児となってしまったので一般の同情を集めている。

惜しい好敵手

段原興行王 談

それは意外な事です。気の毒な事でしたね。私にとっては唯一の好敵手を死なしたようなものです。どうしてどうして。素人上りとは思えませんよ。あの種類の芝居を、あそこまでコナシ付けて来るのは尋常一様の凄腕で出来る事ではありません。私も内心で兜かぶとを脱いでおりました。元来轟君は金持に似合わない精悍せいこんな、腕力と自信の持主で、株式界にいた頃でも百折不撓の評判男だったそうです。劇界に転じても商売柄、各種の暴力団等に脅やかされた事が度々であったのをその都度、自身で面会して武勇伝式の手段で追っ払って来た位で、強気一方の人物

でしたが惜しい事でしたな。天川呉羽さんの芸ですか。あれは
大した天分ですね。あんな人は二人と居りませんよ。とにも角
にもあの芝居だけは止めてもらいたくないものです。仏蘭西と
日本だけですからね。大東京の誇りと云つてもいいものでは
らね。云々。

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

八月四日の午後四時頃、大森山王の一角、青空に輝く^{かし}櫨の茂み
と、ポプラの木立に包まれた轟邸の玄関の豪華を極めた応接室で、
接待用らしいMCCを吸いながら、この夕刊記事に額を集めてい

た二人の巡査が、同時に読終つたらしく顔を上げた。どちらも大森署の巡査であるが、一人は猪村いむらといつて丸々したイガ栗頭。大いひよう兵 肥満ひげおとこの鬚ひげ男おとこで、制服が張千切れはちきそうに見える故参格こさんである。これと向い合つて腰を卸おろした文月ふづきというのは蒼白い瘡せこけた、貧弱そのものみたいに服のダブダブした新米巡査で、豊富な頭髮を綺麗に分けていたが、神経質な男らしくタツタ今読棄よみすてた夕刊の記事を今一度取上げて、最初から念入りに読直し初めた。猪村巡査はそうした若い巡査の熱心な態度を見ると何かしらニヤリと笑つた。腮あご一面の無精鬚をゴリゴリと撫でまわして腕時計をチヨツト覗いたが、やがてブカブカした緞子張りの安楽椅子どんすにそ反りかえつて長々と欠伸あくびをした。

「ア——ツと……ここが搜索本部と発表しとるのに、新聞記者が一向遣つて来んじやないか」

「モウ朝刊の記事を取りに来る頃ですがね」

「司法主任はここを本部と見せかけて新聞記者を追払わんと邪魔ツケで敵かなわんというて、そのために僕をここによこしたんじやが、サテは感付かれたかな。近頃の新聞記者はカンがええからのう」

「司法主任は、よほどこの事件を重大視しておられるのですね」

「むろん重大だよ。被害者が被害者だし、事件の裏面によほど深い秘密があるものと睨んでいるのだからね」

「それにしても新聞記事の本文がアンマリ簡単過ぎやしませんか」

「ナアニ。新聞記者にはソナ気ぶりも匂わしちやおらんよ。こ

の前よけいな事を素破すっぱぬ抜きやがった返報に、絶対秘密を喰くわせている。二三人来た早耳の連中が、夕刊の締切が近いので、それ以上聞出し得ずに慌あわてて帰かえって行いった迄までの事よ。しかしそれにしてもは良く調べとる。コチラの参考になる事が多いようだねえ」

「へエ。つまりこの新聞記事以外の事は、わかっていないんですよか」

「馬鹿な。まだまだ重大な秘密がわかっているんだよ」
文月巡査の眼がキラキラと光った。

「……ソノ……僕はツイ今しがた、非常で呼出されて来たばかりで何も知らないんですが。来ると同時に署長殿からモウ帰かえつても宜よろしいと云いわれたんで、実は面喰めんくらったまま貴方あなたに従したがって来た

んですが」

「見せてやろうか……現場を……」

「ええ。どうぞ……」

「絶対に喋舌しゃべつちやイカンよ。誰にも……」

「ハイ……大丈夫です」

「よけいな見込を立てて勝手な行動を執とるのも禁物だよ」

「……ハイ……要するに知らん顔しておればいいのでしょう」

「……ウン……新米の連中は警察が永年鍛え上げて来た捜索の手順やコツを知らないもんだから、愚にも付かん理屈一点張りで行こうとしたり、盲目滅法めくらめつぼうにアガキ廻かえって却かえってブチコワシをやったりするもんじやよ。こつちへ来てみたまえ。ドウセイ退屈じ

やからボンヤリしとつたて詰まらん。将来の参考に見せてやろう」
 「ありがとう御座います」

二人は丸腰のまま応接間をソツと出て、直ぐ隣室になっている廊下の突当りの轟氏の居室いまに這入はいつた。流石さすがに豪華なもので東と南に向つた二方窓、二方壁の十坪ばかりの部屋に、建物の外観ふさわに相応こけいしい弧型マホガニーの事務机デスク、新型木製卓上電話ビーチパラソ、傘ル型電気スタンド、木枠正方形巻まきあげ上大時計、未来派裸体巨人像の額縁、絹紐煽風機、壁の中に嵌め込まれている木彫寝台きぼりの白ド麻垂幕ロンウオークなどが重なり合つて並んでゐるほかに、綺麗に拭き込んだ分厚いプリント硝子ガラスの窓から千万無数に重なり合つた檜の青葉が午後の日ざしをマトモに受けてキラキラと輝き込んで来る。盛

んに啼ないている蝉せみの声も、分厚い豪華な窓硝子ガラスに遮られて遠く、微かすかにしか聞こえず、壁が厚いせいであろう、暑さもさほどに感じられない。近代科学の尖端が作る妖異な気分が部屋の中一パイにシンカンとみちみちしている感じである。

「この家うちの中は随分涼しいんですね」

「どこかに冷房装置がしてあるらしいね……ところで見たまい。

被害者はこの事務机デスクの前の大きな廻転椅子に腰をかけていたんだ。コレ。この通り、椅子の背中に少しばかり血が附いとるじやろう。被害者轟九蔵氏が、昨夜遅く机にかかって仕事をしている最中に、犯人が背後から抱き付いて、心臓をグツと一突き殺やつたらしいんだ」

「仲々手練てだれな事をやったもんですなあ」

「ピストルを使わぬところを見ると犯人も何か後暗い疵きずを持っていたかも知れんテヤ」

「さあ。どんなものでしょうか」

「とにかく尋常の奴じゃないよ。急所を知つとるんじやから」

「兇器は……」

「兇器は今、署へ押収してあるが、新聞にも掲でている通りこの机の上に在った鋭い、薄ツペラな両刃もろはのナイフだよ。僕もその死骸に刺さつとる実況を見たがね。左の乳の下から背中へ抜け通ったままになつていた。ホラこの通りこの血の塊かたまりの陰にナイフの刺さつた小さい痕あとがあるじやろう」

「刺し方が猛烈過ぎやしませんか」

「むろんだとも。相当、兇悪な奴でも不意打にコレ程深くは刺し得ない筈だよ。それに死骸の表情が非常に驚いた表情じゃったし……」

「へエ。殺された当時の表情は、やつぱり死骸に残るものですかなあ。よく探偵小説なんかに書いてありますが」

「残るものか。僕の経験で見ると死んだ当時の表情はだんだん薄らいで、一時間も経つとアトカタもなくなるよ。僕の見た轟氏の死相しにがおはスツカリ弛んで、眼を半分伏せて、口をダラリと開けたままグツタリとうなだれて机の下を覗いていたよ。僕の云うのはその手足の表情だ。ハツとして驚くと同時に虚空を掴んだ苦悶の

恰好が、そのまんま椅子の脇ひじで支えられて硬直しておったよ。新聞記者には向うの寝台へ寝かしてから見せたがね」

「ナイフの指紋は……」

「無かったよ。犯人は手袋を穿めていたらしいんだね。それよりも大きな足跡があつたんだ。モウ拭いてしまつてあるが、向うの北向きの一番左側の窓から這入つて来たんだね。ところでこの辺では昨夜の二時ちよつと前ぐらいから電いなびかり光がして一時間ばかり烈しい驟しゅうう雨があつたんだが、その足跡は雨に濡れた形跡がない。ホコリだらけの足跡だからツマリその足跡の主は推定、零時半乃至一時四十分頃までの間にあの窓から這入つて来た事になる。ところで又その足跡が頗すこぶる珍妙なんで、皆して色々研究してみた。

がね。結局、地下足袋か何かの上から自動車のチュウブ類似のゴム製の袋をスツポリと穿めて、麻糸らしい丈夫なものでグルグルと巻立てた頗る無恰好な、大きな外観のものに相違ない。それもこの家の向う角の暗闇の中で準備したものに違いない事が、そこに落ちていた麻糸の切屑で推定される……という事にきまつたがね」

「手がかりにはありませんね。それじゃあ」

「ならんよ。よく郊外の掃溜や何かに棄ててある品物だからね。なかなか考えたものらしいよ。探偵劇の親玉の処へ這入るんだからね。ハハハ……」

「最初に発見したのは小間使の……エエト……何とか云いました

ね……」

「市田イチ子だろう。まだ十七八の小娘だがね。サツキ僕等を出迎えていたじゃないか……気が附かなかつた……ウン。その市田イチ子が今朝十時半過ぎだつたと云うがハッキリしたことはわからん。毎朝の役目で今這入つて来た扉ドアをたたいて主人の轟氏を起しにかかつたが、何度たたいても、声をかけても返事がない。部屋の中が何となく静かで気味が悪いので、台所女中の松井ヨネと
いう女から合鍵を貰つて扉ドアを開いてみるとイキナリ現場が見えたのでアツと云うなり扉ドアを閉めると、その把手ハンドルに縋り付いたまま脳貧血を起してしまつた。そいつを朋輩の松井ヨネが介抱して正気付かせて、サテ、扉ドアの内側を覗いて見ると、思わず悲鳴を挙げ

たと云うね。しかも、これは気絶するどころじゃない。キチガイのように喚^わめき立てながら二階へ駈上つて、女優の天川呉羽に報告した……というのが、あの新聞記事以前の事実なんだがね」

「それからその天川呉羽が泣いて復讐云々の光景をドウゾ……」

「ああ。あれかい。あれは今の松井という台所女中の話が洩れたもので、多少、新聞一流のヨタが混っているよ。第一呉羽嬢は泣きもドウモしなかったというんだ」

「へエ。泣かなかった」

「ウン。それがトテも劇的な光景なんで、傍^{そば}に立って見ていた今の松井ヨネ子は自分が気絶しそうになったと云うんだ。……ちようどその時に天川呉羽嬢はチャント外出用の盛装をして二階の自

分の部屋に納まっていたそうだが、ヨネ子の報告を聞くとソツと眼を閉じて眉一つ動かさずに聞き終ったそうだ。それから幽霊のような青い顔になって静かに立上ると、音もなくシズシズと階段を降りて、まだ倒れている市田イチ子をソツと避けながら轟氏の居間に消え込んだ。あとから松井ヨネ子が、又氣絶されちや困ると思つてクツ付いて這入るのを、呉羽嬢は見返りもせず^つに死骸に近付いて、血だらけの白チヨツキに刺さっている短劍の^つ処と、轟氏の死顔を静かに繰返し繰返し見比べていた……」

「スゴイですね」

「ウン。流石は探偵劇の女優だね。大向うから声のかかるところだよ」

「冗談じゃない……」

「それから今度は今の奇怪な足跡を、自分の足の下から這入つて来た窓の方向までズウツと見送ると、轟氏の魂が出て行つたアトを見送るようにうやうや恭しく肩をすぼめて、心持ち頭を下げた」

「へエ。少々変テコですね」

「まあ聞き給え。それからタシカな足取で二三步後に退さがつて轟氏の屍体に正面すると両手を合わせて瞑目し、極めて低い声ではあつたがハッキリした口調でコンナ事を祈つたそうだ。……轟さん。
わたし妾が間違つておりました……」

「妾が間違つていた……」

「ウン……」「この敵讐かたきはキツト妾の手で……」と……それだけ云

うと又一つ叮嚀に頭を下げながら傍そばに立っている松井ヨネ子をか
えりみた。普通の声で「お前。支配人の笠さんりゆうと大森の警察署へ
知らして頂戴ね。御飯はアトでいいから……」という中うちに淋しく
ニツコリ笑ったという」

「へエエツ。豪えらい女があるものですね。まだ若いのに……」

「ハハハ。感心したかい」

「感心しましたねえ。第一タツタそれだけの間に、犯罪の真相を
見貫みぬいてしまったのでしょうか。そんな事を云う位なら警察なん
か当てにしなくともいいだけの自分一個の見解を……」

「アハハ。何を云ってるんだい君は……これは彼女の手なんだよ。
宣伝手段なんだよ」

「宣伝手段……何のですか」

「プツ。モウすこし君は世間を知らんとイカンね。俳優生活をやっている連中は代議士と同じものなんだよ。ドンナ不自然な機会とらを捉まえても自分の名前を宣伝しよう宣伝しようとつとめるのが、彼等の本能なんだ。彼等は舞台や議会だけでは宣伝し足りないんだ。所謂いわゆる、転んでも只是起きないというのが彼等の本能みたいになつているので、この本能の一番強い奴が名を成すことを、彼等は肝に銘じているんだよ」

「驚きましたね。そんなに非道ひどいものでしょうか」

「論より証拠だ。天川呉羽がコンナ絶好のチャンスを見逃す筈がないんだ。果せる哉かな、新聞屋連中はこうした呉羽嬢の芝居に百パ

「セントまで引つかかってしまつて、まるで呉羽嬢の宣伝のために轟氏が殺されたような記事の書き方をしているが、吾々警察官は絶対にソナ芝居やセリフに眩惑されちやいけないだよ。下手な探偵小説じゃあるまいし、名探偵ぶつた天川呉羽の御祈りの文句なんかを考慮に入れたり何かしたら飛んでもない間違いを起すにきまつているんだからね。誰も相手にしてやしないよ」

「成程なるほどねえ。わかりました。しかし、それにしても、まだわからない事が多いようですね」

「何でも質問してみたまえ。現場に立会つたんだから知つてる限り即答出来るよ」

「第一……にですね。あの窓を明あけて這入つて来た犯人が、どう

してわからなかったものでしょう被害者に……」

「ウム。豪い……そこが一番大切な現実の問題なんだよ。同時に司法主任、判検事も、首をひねっているところなんだよ。あの通り窓の締りは、捻込みねじこの真鍮棒になつとるし、あの窓枠の周囲には主人の轟氏以外の指紋は一つも無い。しかも、それがあの窓に限って念入りに、ベタベタと重なり合つて附いているのだから変へ挺んてこだよ。よつぽど特別な……或る極めて稀な場合を想像した仮説以外には、説明の附けようがないのだ」

「へエ。轟氏がお天気模様か何かを見たあとで締りをするのを忘れていたんじゃないですか」

「どうしてどうして。被害者は平生から極めて用心深くて、寝が

けに女中に命じて水を持って来させる時に、一々締りを付けさせるし、そのアトでも自分であらた検めるらしいという嚴重さだ」

「それじゃ家内の者が開けて、加害者を這入らせたとでもいうのですか」

「つまりそうなるんだ……という理由はほかでもない。この事務デス机クの右の一番上の曳ひきだし出しに一挺のピストルが這入っていた。それも旧式ニツケルめつき鍍金の五連発で、多分、明治時代の最新式を久しい以前に買込んだものらしい。弾丸たまも手附かすの奴が百発ばかり在ったが、それを毎日毎日手入れをしておった形跡があるのじやから、被害者の轟氏はズット以前から何か知ら脅迫観念とらに囚とらわれておったことがわかる。それが仮りに他人うらみから怨を受けているも

のとすれば、やはりピストルと同じ位に古い因縁であつたばかりでなく、毎日毎日手入れをしておかなければならぬ位ヒドイ怨みであつた事が想像出来るじやろう。ところでその轟氏が恐れている相手が、向うの窓を轟氏の手で開けさせて這入つて来たのに、轟氏はそのピストルを手にしておらぬのみならず、自分で窓の締りをあけて導き入れたものとすれば、その人間は被害者の轟氏にとつて、よつぽど恐ろしい人物であつたという事になる」

「そんなに恐ろしい脅迫力を持った人間が、この世の中に居るものでしょうか。自分を殺しかねない相手という事が、被害者にわかつていれば尚更じゃないですか」

「そこだよ。そこに何となく大きな矛盾が感じられるからね。判

検事も司法主任も相当弱っていたらしいんだが、間もなくその矛盾が解けたんだ」

「ほう……どうしてですか」

「わからんかい」

「わかりませんねトテモ。想像を超越した恐ろしい事件としか思えませんか。これは……」

「ナアニ。それ程の事件でもなかったんだよ」

「ヘエ。どうしてわかったんです」

「その事務機デスクの曳出ひきだしを全部調べたら、右の一番下の曳出から脅迫状が出て来たんだ」

「ホオー。何通ぐらい出て来たんですか」

「それがソノ……タツタ一通なんだ。僕はよく見なかつたが、司法主任の横からチョット覗いてみると普通の封緘ふうかんハガキに下手な金釘流かななくぎでバラリバラリと書いたものじやつたよ。表書うわがきは単に大森山王、轟九蔵様と書いて、差出人の処ところ書がきも日附も何もない上に、消印スタムプがドウ見てもハッキリわからん。一時は良かったが近頃の郵便局の仕事はドウモ粗慢でイカンね。司法主任はスツカリ憤おこつとつたよ。当局に申告して消印スタムプのハッキリせぬ集配局を全国に亘って調べ出してくれると云っておつたが……」

「中味にはドンナ事が書いてあつたんですか」

「ただコレだけ書いてあつた。大正十年三月七日……芝居ではないぞ……と……」

「大正十年三月七日……芝居じゃない……」

「ウン。そうだ。それから泣いている娘……だか何だかわからんが、世間からは娘と同様に見られとるからそのつもりで話するが……その娘の甘木三枝こと天川呉羽嬢あまきを呼出して、その脅迫状を見せるとコンナ字体についてはチツトモ記憶がない。文句の意味も何の事やらカイモクわからぬ。前にコンナ手紙が来たような事実も記憶しておらんと云う」

「成る程。……そこでサツキの呉羽嬢のお祈りの文句に触れてみたかったですな。何か参考になる事を喋舌しゃべらして……」

「ウン司法主任がチョツト触れていたよ。ちょうどその時に、女中を訊問していた刑事の梅原君が、その事に就いて取あえず報告

したもんだからね……すると果せる哉だ。……あれは妾があの時かな口惜しくや紛れにそう申しましただけの事で、女の妾に何がわかりましよう。犯人が出て行つた方向を拝みましたのは、そうすると遠くに居る犯人が何となくドキンドキンとして思わぬ失策を仕出すという迷信が、外国の芝居に使つてありましたのでツイ、あんな事を致しまして……と真赤になつて弁解しておつた。だから、つまり目的は宣伝に在つたのだね。これは彼等の本能なんだから、深く咎めるには当たらないよ。司法主任も検事も苦笑しておつたよ」

「ソレツキリですか」

「イヤ……それから呉羽嬢はコンナ事を云い出しおつた。……ハツキリとは申上られませんが、轟はこの四五日前から何だかソワ

ソワしていたように思います。今までドンナ悲況に陥っておりましても、私を見ると直ぐにニコニコして何か話かけたりしておりましたものが、この頃はソナ気振けぶりも見せませぬ。ただ緊張した憂鬱な、神経質な顔をして、私が何か云おうとしましてもチラチラと瞬またたきした切り自分の部屋へ逃込んで行きます。もちろん、その原因は私にはわかりかねますが、轟の劇場関係と、財産関係の仕事は皆、呉服橋劇場の支配人の笠圭之介りゆうけいのすけさんが一人で仕切って受持つておられます。大正十年の三月七日といえ、私が三つの年の事ですから、何事も記憶に残っておりませぬ。私はその三つの年に何かの事情で、年老としおいた両親の手から引取られて轟の世話になって来ておりますので、それから今年までの二十年間、

轟は独身のまま私を育てるために色々と苦勞をしておりますが、詳しい話は存じませんと巧妙に逃げおった」

「何か隠している事があるんじゃないですか」

「それがないらしいのだ。劇場主なんちういうものは一般の例によると相当複雑な生活をしているもんじやが、今の呉羽嬢や、女中達や、支配人の笠圭之介の話なんかを綜合すると、この被害者ばかりは特異例なんだ。轟九蔵氏に限って非常に簡單明瞭な日常生活である。劇場付の女優に手を出したり、花柳の巷ちまたを泳ぎまわったりするような不規則は絶対にした事がない……という証言だ。全くの独身生活者で、ただ娘分の三枝を、世界一の探偵劇スターとして売出す事以外に楽しみはなかったらしいのだ」

「へエ。面白いですね。そうした変態的な男と女と二人切りの生活が、全くの裏表なしに継続出来るものでしょうか」

「アハハ。ナカナカ君は疑い深いなあ。まあこつちへ来たまえ。ユツクリ話そう」

二人は又、応接間へ引返して申合わせたように又もMCCをつまんだ。

「美味い煙草だなあ。一本イクラ位するもんかなあ。二十銭ぐらいしはせんか」

「イヤ。そんなにはしないでしょう。二十銭出せば葉巻が二本来ますからね」

二人は互いちがいにコバルト色の煙を吹上げ初めた。

「君は天川呉羽と轟九蔵の性関係を疑つとるのじゃろう」

文月巡査が忽ち赤くなつたが、そのまま微笑してうなずいた。

「ハハハ。ナカナカ隅に置けんのう君も……」

「やはり……その……何かあるんですか」

「ところが今のところ、何も疑わしいところがないんだよ」

「十分……十二分に疑つてみる必要があると思ひますなあ。事によると今度の事件の核心はそこいらに在るかも知れませんかからねえ」

「御高説もつともじゃが……まあ聞き給え。こうなんだよ。二人の日常生活を説明すると……これは二人の女中の陳述を綜合したものじゃが……先ず毎朝九時に娘の呉羽が先に起きて湯に這入る。

女優としてはかなり早起の組だね。それから一時間ばかりかかって化粧をして、着物を着かえて出て来る」

「女中も何も手伝わないのですか」

「ウン。手伝わせるどころか、湯殿の入口をガツチリと鍵かけて、誰が来ても這入らせないそうだが、これは何か呉羽嬢が、天川一流ともいふべき秘密の化粧法を知っておつて、それを他人に盗まれない用心じやという話じやが……」

「それは女中の話でしょう」

「そうじや。……一方に天川呉羽嬢に云わせると私は自分の肌を他人に見られるのが死ぬより嫌いです。無理にでも見ようとすると人があつたら、私は今でも自殺します……といううちにモウ、ヒ

ステリーみたいな顔を歪めて眉をピリピリさせおったわい。ハハハ

「すこし云う事が極端ですね。何か身体に刺青でもしているのじゃないでしょうか」

「そんな事かも知れんね……ところでそうやって浴室から出て来た呉羽嬢の姿を見ると、何度出合うてもビツクリするくらい美しい。青々とした濃い眉が生え際に隠れるくらいボーツと長い。睫毛が又西洋人のように房々と濃い。眼が仏蘭西人形のように大きくて、眦がグツと切れ上っている上に、瞳がスゴイ程真黒くて、白眼が、又、気味の悪いくらい青澄んで冴え渡っている。その周囲を、死人色の青黒い、紫がかったお化粧でホノボノと隈取って、

ダイヤのエース型の唇を純粹の日本紅で玉虫色に塗り籠めている
……」

「ハハハ。どうも細かいですなあ」

「女中がソウ云いおつたのじゃからなあ……オツト忘れておつた。鼻がステキだと云うのだ。芝居のお殿様の鼻にでもアンナ立派な鼻はない。女の鼻には勿体ないと女中が云いおつたがね。ハハハ……女じゃからそこまで観察が出来たもんじゃ。そいつが四尺近くもあろうかと思われる長い髪を色々な日本髪に結うのじゃそうなが、髪結いの手にかけてと髪かみのけ毛が余つて手古摺てこずるのでヤハリ自分で結うらしい」

「してみると入浴の一時間は長くないですな。寧ろ短か過ぎる位むし

ですな」

「何でも呉羽は早變りの名人だけに、余程手早く遣るらしい。それからこの頃だと紅色の燃え立つような長襦じゅばん袴はかまに、黒っぽい薄物の振袖を重ねて、銀色の帯をコツクリと締め上げて、雪のようなフェルト草履ぞうりを音もなく運んで浴室から出て来ると、とてもグロテスクで、物すごくて、その美しくしさというものは、ちようどお墓の蔭から抜け出た蛇の精か何ぞのような感じがする。恐怖劇の女優というが、真昼さなかに出合うてもゾーツとするのう……ハハハ……これは勿論、吾輩の感想じゃが……」

「見たいですねえ。ちよつと……そんなタイプの女は想像以外に見た事がありません」

「ハハハ。そのうち帰って来るからユツクリと見るがええ。しかし惚れちやイカンゾ」

「……相すみません……洋装はしないのですか」

「ウム。時々洋装もするらしいが、その洋装はやはり旧式で、帽子の大きい袖の長い、肌の見えぬ奴じやそうなが、よく似合うという話じやよ」

「へエ。それから今チョット不思議に思ったのですが、その呉羽嬢は湯殿の中からイキナリ盛装して出て来るのですか」

「そうらしいのう」

「妙ですね。そうすると平生着ふだんぎというものを持たない事になりますね。……つまり外に出てから着かえはしないのですか……普通

の女のように……」

「ハハハハ。ナカナカ君も細かいのう。探偵小説の愛読者だけに妙なところへ気が付くのう。そこまでは未だ調べが届いておらん」
「残念ですなあ。そこが一番カンジン、カナメのところかも知れないのに……」

「まあ話の先を聞き給え。それから十時頃に、その呉羽嬢が浴室を出ると、女中が主人の轟九蔵を起しに行くが、コイツが又一通りならぬ朝寝坊でナカナカ起きない。それをヤツト起して湯に入れると間もなく朝飯あさはんになる。それから十二時か一時頃になつて支配人の笠圭之介が遣つて来て三人寄つて紅茶か、ホット・レモンを飲みながら業務上の打合わせをする。時には三人で大議論を

オツ初める事もあるが大抵のことは呉羽嬢の主張が通るらしい」

「その支配人の笠という男はドンナ人間ですか」

「僕に負けんくらい巨大なおおき 赭あからが 顔おの、脂あぶらの乗り切った精力的な

男だ。コイツも独身という話じやが」

「何だかヤヤコシイようですね。呉服橋劇場の首脳部の三人が揃すくいも揃すくつて独身となると……」

「ところがこの笠という男は有名な遊び屋でね。それも頗すこぶる低級

に属しとる。つまらない女ばかり引っかけまわつて、この大森の

砂風呂なんかによく来るので、自然吾々の仲間にも顔が通つてい

る。臨検してみると「ヤア君か」といったアンバイでね。ハハハ。

話すと面白い男だよ。誰でも初めて劇場で合うとこの男を劇場主

の轟と間違える位、立派な風采じゃがね。そいつが来てその日の事務の打合わせが済むと、一時か二時頃から三人同伴で劇場や、新聞社に行く事もあれば、別々に行く事もある。帰って来るのは大抵夜中の十二時前後で、その時も三人別々だったり一緒じゃったりするが、早い奴から湯に這入って軽い夕食を摂る。笠支配人はいつも麦酒^{ビール}を飲んで少々ポツとしたところで自動車を呼んで丸の内のアパートへ帰る……かドウか、わからないがね。残った二人^{うち}の中で主人の轟は事務室の片隅の寝台へ寝る。呉羽嬢は二階の別室に寝るのじゃが、その時に呉羽嬢は寢室の鍵をやはりガツチリと掛けて、その上から今一つ差込^{かんぬき}の門まで卸すとモウ誰が来ても開けない。もつとも寝がけに睡眠剤を服^のむらしいがね」

「轟氏の方は……」

「呉羽嬢が「おやすみ」を云うたアトで三十分か一時間ぐらい手紙を書いたり何か仕事をするのが習慣になつとるらしいが、その時には必ず浴衣ゆかたに着換えている。そうしてこれも何か知らん薬を服のんでから寝るらしいがね」

「当日も変つた事はなかつたんですね」

「イヤ。あつたんだ。しかもタツタ一つ奇妙な事があつたんだ。少々神秘的なことが……」

「へエ。神秘的と云いますと……」

「それが面白いのだ。この家の女中はズツト以前……この家が建つた当時から二人きりに定きまっている。こう見えてもこの家は案

外広くないのだ。部屋らしい部屋はタツタ四室ましかない上に、万事がステキに便利に出来ているからね……とところで一番古く、建った当時から居るのが今云うた松井ヨネ子という二十六になる逞ましい肉体美の醜オツペシヤン女だ。コイツが田舎出の働き者で、家の内外の掃除から、花晶の世話まで少々荒っぽいが一人で片付ける。しかも轟九蔵と天川呉羽の性生活について非常な興味を持つていらっしゃるらしく、そいつがわかるまでは断然お暇を貰わないつもりですとか何とか、吾々の前で公々然と陳述する位、痛快な女なんだ。何でもどこか極めて風俗の悪い村から来ているらしく、万事心得た面構えをしているが、しかし遺憾ながら、まだ二人の関係については突詰めた事を一つも掴んでいないので、ああした年頃の未

婚の女にあり勝ちな悩みをこの問題一つに集中しているらしいんだね。この問題に限ってチョット突つつくと直ぐに止め度もなくペラペラと喋しゃべり出しやがるんだ。どう見ても普通の親娘おやこじゃありません……と熱烈に主張するんだ」

「なるほど面白いですね」

「ところが今一人居る市田イチ子というのは、やはり田舎からのポット出だが、今年十八になったばかり。つまりそうした好奇心の一番強い真盛りの娘ツ子で、やっと一昨日おとつ来たばかりのところへ、先輩のヨネ子からこの話を散々聞かされた訳だね。それから呉羽嬢の初のお目見得をしてみると、あんまり美しいのでビツクリした拍子に呉羽嬢の姿がブロマイドみたいに眼の底に泌しみ

付いてしまつて、日が暮れたら怖くて外へ出られなくなつた。夜具を引つ冠ると眼の前にチラ付いてスツカリ冴えてしまつた……」

「アハハハ。形容が巧いですね」

「イヤ。笑いごとじゃない。その娘が自身に白状したんだ。ところへ昨夜の事、女中部屋の扉ドアの真向いに当る廊下の突当りで、主人の居間の扉ドアがガチャリと開あいた音がしたので、ハツと眼を醒まして無意識の裡うちに起き上り、鍵穴からソツと覗いてみると、いつも寝間着姿で仕事をしていると聞いていた主人が、チャント洋服を着ている。今しがた帰つて来て、イチ子自身がホコリを払つてやつた時の通りの黒いモーニングと白チヨツキと荒い縞のズボンけさを穿はいている……つまり今朝の屍体けさが着ていたのと同じものだね。

のみならず主人の背後の扉ドアの蔭からチラリと動いた赤いものが見えた。大きな蛇が赤い舌を出した恰好に見えたのでギョツとして、頭から布団を冠かぶつてしまつたが、あとから考えると、それはお嬢様の振袖と、紹ろの襦じゆ袷ばんの袖だつたに違ちがひないと云うんだ。……何でもその時に女中部屋の時計がコチーンコチーンと二時を打つのを夜着よぎの中で聞いたというがね」

「ははあ……重大な暗示ヒントですなあ。それは……」

「暗示ヒント? 何の暗示だというのだね」

「イヤ。別に暗示ヒントという訳ではありませんが、しかし、それはソナに遅くまで、轟九蔵氏と天川呉羽嬢があ事務室に居た証拠として考えてはいけないうか」

「そうすると君は天川呉羽が轟九蔵を殺したというのかね。それだけの事実で……」

「イヤ。そんな怪談じみた想像説は、この場合成立しません、ツイ今しがた参りました奇妙なゴムチューブの足跡が、呉羽嬢と九蔵氏が一いっしょ所に居った時に這入って来たものか、それとも相前後して出入りしたものとすれば、ドチラが後か先かという事が、この事件を解決する重大な鍵となつて来ましょう」

「ウーム。自然そういう事になるね」

「ところがその足跡の主が這入って来て、出て行ったのが、お話の通り二時以前としますかね。雨が降り出してから帰った形跡はないのでしょうか」

「ウム。ない」

「それから呉羽嬢が居たのが二時頃としますとドチラにしても二時以後は呉羽嬢がタツタ一人、轟氏の傍に居た事になります。そうすると二時頃までピンピンしていた轟氏を殺したものは絶対に呉羽嬢以外には……」

「アハハハハ。イヤ。名探偵名探偵。その通りその通り。寸分間違いない話だが……そこが探偵小説と実際と違うところなんだよ。つまり君がアンマリ名探偵過ぎるんだ」

「……名探偵過ぎるって……」

「つまり君はアンマリ考え過ぎているんだよ。犯人の目星はモウ付いているんだからね。寝呆ねぼけた小娘の眼で見た事なんか相手に

せんでモツト常識的に考えんとイカン」

「常識的と云いますと……」

「まあ聞き給え。こうなんだ。呉羽嬢は無論そんな真夜中に起きて、そんなに盛装なんかして九蔵氏の部屋に這入った覚えなぞ、今までに一度もないと云い張るんだ」

「それあそうでしょう」

「女中の市田イチ子の奴も、今になって考えてみますと何だか、自分の眼が信じられないような気がします。あれは私がトロトロした間まに見た夢なのかも知れません……なんかとアイマイな事を云い出しやがるし……」

「云うかも知れませんか。そんな事をウツカリ証言したら、アト

で呉羽嬢に何をされるか解りませんからね」

「君。想像は禁物だよ。チャンとしたよりどころ拠点のある証言を基礎

として考えなくちゃ……」

「モウ、それだけですか。変った事は……」

「……アツ……それから今一つチョット変った事がある。何でも
ない事だが、君一流の想像を複雑にさせる材料には持つて来い
ろう。ほかでもない……今朝けさ、呉羽嬢の起きるのが約一時間ば
かり遅れたんだそうだ。これも市田イチ子の証言だがね」

「へエ。いよいよ以て聞捨てになりませんね」

「ウン。平生いっつもは女中に起されなくとも、キツチリ九時には起きて
来た呉羽嬢が、今朝けさに限って九時半頃まで起きないので、ヨネと

イチの二人の女中が顔を見合わせたそう。どうかしたんじやないかというので二人がかりで起しに行ってみたらグーグー寝ている気はいがする。それを猛烈に戸をたたいたり、叫んだりしてヤツト起したりしたら、不承不承に起きて来た。真白い羽はぶたえ二重のパジャマを引っかけながら、どうも昨夜、催眠剤おくすりを服み過ぎたらしいと云い云い湯に這入ったというんだ」

「へエ……わからないなあ」

と云ううちに文月巡査は、めのまえ眼前的テーブルの机の上に身体からだを投げかけて両脇を突いた。シツカリと頭を抱え込むと、溜息と一所に云った。

「スツカリわからなくなっちゃった」

「何がわからんチューのか……ええ？」

「……もし、それが事実なら、やっぱり呉羽嬢が九蔵氏を殺したのじゃない。不思議な足跡の主……つまり九蔵氏を脅迫した奴が殺したんだ」

「ホオ。なかなか明察だね。どうしてわかる」

若い文月巡査の蒼白い額はジツトリと汗ばんでいた。眼の前の空間を睨んで、魘うなされているような空虚な声を出した。

「呉羽嬢と、その犯人とは連絡がある……九蔵氏を殺した犯人が無事に逃げられるように、わざと朝寝をして、事件の発覚を遅らした……」

「ワツハツハツハツハ。イカンイカン。イクラ名探偵でも、そう神經過敏になっちやイカン。世の中には偶然の一致という事もある

れば、疑心暗鬼という奴もあるんだよ。シツカリし給え。アハアハアハ……」

文月巡査は夢を吹き飛ばされたように眼をパチクリさして猪村巡査の顔を見た。吾に帰つて頭の毛を叮嚀われに撫で付け初めた。

「しかし……それは事実でしょう……」

「おおさ。無論事実だよ。しかもよく在勝ありがちの事実さ。しかも、それよりもモット重大な事実があるんだから呉羽嬢の寝過し問題なんかテンデ問題にならん」

「ドンナ事実です」

「今話した支配人の笠圭之介ね。その笠支配人が台所女中のヨネからの電話で、丸の内のアパートから自動車で飛んで来たのが、

今日の十二時チョット前だった。それから主人の死体や何かを吾々立会の上で調べている中に、机の上に小切手帳が投出してあるのに気が附いた。調べてみると、昨日の日附で堀端銀行の二千円の小切手を誰かに与えている事がわかった。そこで万が一にもと気が付いて、堀端銀行に問合わせてみると、今朝の事だ。堀端銀行が開くと同時に二千円を引出して行った者が居るといふ。それは紹の羽織袴に、舶来パナマ帽の立派な紳士であつた。色の黒い、背の高い、骨格の逞しい肥つた男で、眉の間と鼻の頭に五分角ぐらいの万創膏を二つ貼つていたので、店員は最初何がなしに柔道の先生と思つていた。それだけに至極沈着しているようであつたが、しかし這入つてから出るまで一言も口を利かず、何気

もない挙動の中に緊張味がみちみちて、油断のない態度であった。尚、新しいフェルトの草履を穿いて、同じく上等の新しい籐とうのス
テツキを握っていたという」

「それが犯人だと云うんですか」

「むろんそうだよ。その報告を聞いた笠支配人は、その小切手を誰も触らないように、紙に包んで保存しておいてくれと頼んで、直ぐにその旨を吾々に報告したがね」

「ナカナカ心得た男ですなあ」

「ウン。近頃の素人は油断がならんよ。つまりその犯人は轟九蔵氏に脅迫状をタタキ附けた後のちに、九蔵氏が約束通り事務室で待っているところへ、窓を開けさして這入って来た。それから二千元

の小切手を書かせ、後難を恐れて不意打に刺殺し、発覚しない中に金を受取つて行衛を晦ましたという事になるんだね。つまり九蔵氏が……もしくは轟家の連中が、普通よりも寝坊である事を熟知している犯人は、朝早くならば大丈夫と思つて、堂々と金を受取りに行つたと思われるんだ。何でもない事のようにやが今の眉の間と、鼻の頭に貼つた五分角ぐらいの万創膏が、アトで研究してみると実に手軽い、しかも恐ろしい効果のある変相術じやつたよ。余程、甲羅を経た奴でないとコンナ工夫は出来ん。君もアトで実験してみたまえ、万創膏の貼り方と位置の工合で、同一人でも丸で見違える位、印象が違つて来るからなあ。おまけに運動家らしく肩でも振つて行けば、誰でも柔道の先生ぐらいに思つて

疑う者は居らんからなあ」

「その小切手に指紋はないでしょうか」

「ドツサリ附いている筈だよ。今調査中じゃが、小切手を書いたこの家の主人のもの、受取った犯人のもの、銀行員のものすくなと些くとも三通りは附いている筈だよ。銀行に來た犯人は手袋を穿めていなかつたんだからね。笠支配人は到つて腰の低い、ペコペコした人間じゃが、流石さすがに鋭いところがあると云つて、皆感心しておつたよ」

「……ところで……その支配人と女優の呉羽は今どこに居るのですか」

「犯人の星が附いて嫌疑が晴れたので、直ぐに大森署へ來て、署

長の手で諒解を得てもらって、二人とも大喜びでそのまま呉服橋劇場へ飛んで行ったのが二時半頃じゃったかなあ。今が劇場の生死の瀬戸際というんでね。何でもこの記事が夕刊に出たら、満都の好奇心を刺戟して劇場がパイになるかも知れないと云ってね。少々慌て気味で二人とも出て行つたよ」

「少々薄情のようですね。そこいらは……劇場関係の人間はアラユル階級の中でも一番薄情だつていう事ですが……この夕刊を見たら誰でも今夜は休場だと思うかも知れないのに……」

「それは、わからないよ。見物人という奴は劇場こやも関係者よりもモット薄情な、モット好奇心の強い人種だからね。何でも亡き轟氏の魂はあの劇場に残っているに違いないのだから、今日の芝居を

中止しないのが、せめてもの孝行の一つですと、眼を真赤にして云っていたがね。呉羽嬢は……」

「今何を演^やっているのですか」

「何を演^やっているか知らんが……アツ。そうそう。大森署へ切符を置いて行きおったつけ……新四谷怪談とか云っていたが……」

「へエ。そうするとアトはその犯人を捕まえるだけですね」

「そうだよ。相当スゴイ奴に違いないよ」

「そうすると疑問として残るのは……」

「疑問なんか残らんじやないか」

「イヤ。これは僕が勝手に考えるんですがね。第一は被害者の轟九蔵氏が、その犯人を迎え入れた心理状態……」

「それは犯人を取調べればわかるじやろ」

「第二が、その屍体に現われた無抵抗、驚愕の状態……」

「無抵抗とは云いはしないよ」

「けれども事実上、無抵抗だった事はわかっていよう。そんな場合には無抵抗の表情と驚愕の表情とは同時に表現され得るものですし、同じ意味にも取れない事はないでしょう。のみならず、そうした被害者の犯人に対する気持は机のひきだし出に在ったピストルを取出さずに、犯人を迎え入れた事実によって、二重三重に裏書きされていけませんか。犯人が被害者に対して、殺意を持っていなかった事を、被害者自身も洞察して、信じ切っていたらしい事も想像され得るじやないですか」

「ううむ。そういえばソウ考えられん事もない。ナカナカ君は頭がええんだな」

「……そ……そんな訳じゃないですが……それから事件当夜の二時頃に主人の部屋に居た呉羽嬢の行動に関する秘密……」

「……あ……そいつはドウモ当てにならんよ。何度も云う通り市田イチ子の陳述がアイマイじゃから……」

「アトからアイマイになったんでしよう。ですから一層的確な意味になりはしませんか」

「中々手厳しいね。僕が訊問されとるようだ」

「ハハハ。いや。そんな訳じゃないですが……アトは轟九蔵氏の絶命時間の推測です。昨夜何時頃という……」

「ハハハ。二時以後だったら断然、呉羽嬢をフン縛るつもりかね……君は……」

「その方が間違いないと思います」

そう云う文月巡査の顔からは血の気がなくなっていた。背筋へ氷を当てられたような笑い顔をしながら三本目のMCCへわななくマツチを近付けた。そうした昂奮を気持よさそうに眺めやった猪村巡査は、毛ムクジャラの両手をノウノウと後頭部に廻した。

「ところがその絶命の時間がモウわかつているんだよ。サツキ本署へ電話をかけてみたら、一時間ばかり前に大学から通知が来たそうだ」

「ナ……何時頃ですか」

「今朝の三時半、乃至、四時半頃だというんだ」

文月巡査の手からマツチと煙草が落ちた。猪村巡査の顔を凝視したまま唇をわななかした。

「ハハハ。よつぽど驚いたらしいね。ハハハ。小説や新聞の読者に云わせたら、女優を縛った方が劇的で面白いかも知れんがね。

そうは行かんよ。犯人と轟九蔵氏との間には、何か知らん重大な秘密がある。だから一度出て行った犯人は轟九蔵氏の密告を恐れて引返し、推定の時刻に兇行を遂げて立去つたものとしたらドウだい。探偵小説にならんかね。ハハハハ……」

笑殺された文月巡査は、いかにも不満そうに落ちた煙草を拾い上げると、腕を組んで椅子の中に沈んだ。眼の前の空気を凝視し

て、夢を見るようにつぶやいた。

（探偵小説……小説としても……事実としても……何だか間違まちがい
だらけのような危なっかしい気がしますなあ。ホントの犯人は別に在りそうな気が……）

「困るなあ。君にも……何でもカンでも迷宮みたいに事情がコンガラガツていなくちゃ満足が出来ない性分だね。犯人が意外のところ居なくちゃ納まらないんだね君は……」

「ええ。どうせ僕はきよう非番ですから、実地見学のつもりでお願いして、ここに連れて来て頂いたんですから、あらゆる角度に視角を置いてユツクリ考えてみたいと思ひまして……」

「考え過ぎるよ君あ……事実はモット簡単なんだよ」

「ドウ簡単なんですか」

「犯人はモウ泥を吐いているんだよ」

「ゲツ。捕まったんですかモウ……犯人が……」

「知らなかったかね」

「早いですねえ……ステキに……」

「ハハハ。驚いたかい。……とはいうものの僕も少々驚いたがね。

きよようの正午過ぎに上野駅で捕まったよ。大工道具を担いでいた

そうだが、どうも挙動が怪しいというので、押えようとする

と大工道具を投棄てるが早いまっしぐらか。驀まっしぐら地に構内へ逃込んだ。そいつが

又驚くべき快速で、グングン引離して行くうちに、なおも追い迫

つて来る連中を撒くために走り込んで来た上り列車の前を、快足

を利用して飛び抜けようとしたハズミに、片足が機関車のライフガードに引つかかかって折れてしまった。運の悪い奴さ。まだ非常ズ手配キがまわっていない中うちだからね。呉羽嬢の御祈祷が利いたのかも知れないがね……ハハハ……。そこへ大森署から電話をかけた司法主任が様子を聞いて、もしやと思つて駈付けてみると、そいつが有名な生せい蕃ばん小僧という奴で、堀ほり端ばた銀行の二千円をソックリそのまま持っていた。小切手と鑑識課の指紋がバタバタと調べ上げられる。電光石火眼にも止まらぬ大捕物だったね。満都の新聞をデングリ返すに足るよ。何でも十年ばかり前に静岡から信越地方を荒しまわった有名な殺人強盗だったそうだ」

「……殺人強盗……」

「そうだ。そいつが負傷したまま大森署へ引っぱって来られるとスラスラと泥を吐いたもんだ。如何にも私は轟九蔵を殺しました。私はあの女優の天川呉羽の一身上に関する彼奴きやつの旧悪を知っておりましたので、昨夜の一時半頃、あそこで面会しまして、二千元の小切手を書かせて立去りましたが、アンマリ呉くれっぷりがいいので、万一密告さしあしめえかと思うと、心配になって来ましたから、今度は自動電話をかけて待つているように命じて引返し、十分に様子を探つてから堂々と玄関の締りを外させ、スリツパを揃えさせて上り込み、九蔵と差向いになつて色々と下らない事を話合つているうちに、どうも彼奴きやつの眼色めいろが物騒だと思ひましたから、私一流の早業で不意打にやつつけました。それがちようど三時半頃

だったと思います。そのまま窓から飛出してしまいましたが……
恐れ入りました……」

「……ナアアンダイ……」

「アハハハ。恐れ入ったかい。ハハハ。モウ文句は申しません。
潔く年貢を納めますと云ったきり口を噤つぶんでしまったのには少々
困ったね。その轟九蔵との古い関係についても固くなって首を振
るばかり……しかし現げんじょう場の説明から、殺す挙動しぐさまで遣つて見
せたが、一分一厘違わなかったね。野郎、商売道具の足首を遣やら
れたんでスツカリ観念したらしいんだね」

「それにしても恐ろしくアツサリした奴ですな。首が飛ぶかも知
れないのに……」

「殺人強盗の中にはアンナ性格の奴が時々居るもんだよ。ちょうど来合せた呉羽嬢と笠支配人にも突合わせてみたが、どちらも初めてと見えて何の感じも受けならしい。ただ犯人が呉羽嬢に対して、すみませんすみませんと頭を二度ばかり下げただけで調べ側としては何の得るところもなかった」

「それからドウしたんです」

「どうもしないさ。推定犯人が捕まって自白した以上、警察側ではモウする事がないんだからね。君等と同じに非常召集をした連中がポツポツ来るのを追返してしまった。笠支配人と呉羽嬢も司法主任からの説明を聞いて大喜びで劇場に行ってしまった。それでおしまいさ。アハハハハ……」

「なあアんだい……」

猪村巡査は高笑いしいしい立上った。文月巡査の背後にまわつてダブダブの制服の背中を一つドシンとどやし付けた。

「ハハハ。馬鹿だな君は……そんなに探偵小説にカブレちやイカシよ」

文月巡査は首筋まで真赤になつてしまつた。眼を潤ませながら真剣になつて弁明した。

「……コ……これは僕の趣味なんです。ボ……僕の巡査志願の第一原因は、やっぱりメチャクチャに探偵小説を読んだからなんです」

「馬鹿な。探偵小説なんちういうものは何の役にも立つもんじゃ

ない。その証拠に探偵作家は実地にかけると一つも役に立たん。自分の作り出した犯人でなければ絶対にヨオ捕まえんというじゃないか……」

文月巡査は残念そうに深いタメ息をした。瞑想的な、幾分気取った恰好でMCCの煙を吐いた。

「ああ……タタキ附^{つけ}られちゃった」

「アハ……御苦労さんだ。トウトウ犯人を取逃しちやったね。フフ……」

「どうも貴方^{あなた}は意地が悪いんですなあ。早くそう云って下されあコンナに頭を使うんじやなかったのに……」

「そんなに頭を使ったかね」

「……どうも変だと思いましたよ。笠支配人と呉羽嬢に対する嫌疑がチツトモ掛らないまま芝居へ行っちゃつたんですからね」

「当り前だあ。その時にはモウ犯人の爪つめいん印が済んでいたかも知れん」

「へエ。それじゃあ……」

と文月巡査が妙な顔になつてキョロキョロした。

「ここが搜索本部と仰言つたのは……」

「ナアニ。あれあ嘘だよ。君が探偵小説キチガイで、まだ一度も実地にブツカツタ事がないって云つてたから、ちよつとテストをやつてみた迄よ。ちようど今日は僕も非番だったから笠支配人に頼まれて、ここで留守番をしてやる約束をしたもんだからね。キ

ツト退屈するに違いないと思って君をペテンにかけて引っぱって来たわけさ。どうだい面白かったかい」

「ああ。つまらない……」

「アハハ。そう憤^{おこ}るなよ。モウ暫くしたら夕食が出るだろう。その中に呉羽嬢が帰って来たら一度見とくもんだよ。奥さんにいいお土産だ」

「……相すみません……僕はまだ未婚です」

「おほほう。そうかい。そいつは失敬した。そんなら丁度いい。夕飯を喰ってから一つステキな美人を見せてやろう」

「へエ。まだ美人が居るんですか。この家に……」

「いや。この家じゃないがね。ツイこの裏庭の向う側なんだ。呉

服橋劇場の脚本書きでね。江馬えま何とかいう人相の悪い男が、妹と二人で住んでいるんだ」

「アツ。江馬兆策が居るんですか。コンナ処に……」

「何だ。君は知つとるのかいあの男を……」

「探偵小説を読む奴でアイツを知らない者は居ないでしょう。相当のインテリと見えますが、非常な醜ぶおとこ男のオツチヨコチヨイ、一流の激情家の腕力自慢というところから、よくゴシツプに出て来ます。芝居に關係している事は初耳ですが、田舎ダネの下らない探偵小説を何とかかんとかといつてアトカラアトカラ本屋へ持込むので有名ですよ。彼奴あいつの小説を読むよりも、写真に出ている彼奴あいつの顔を見ている方が、よつぽどグロテスクで面白い……」

「その妹の事は知らないかい」

「妹が居る事も知りません」

「その妹というのが、真実の兄きょうだい弟だいには相違ないんだが、音楽

学校出身の才媛で、兄貴とはウラハラの非常に品のいい美人なんだ。何でも、死んだ轟氏がパトロンで兄妹の学費を出してやったという話だが、その妹と轟氏との関係の方がダイブ怪しいらしい」

「ああ。もうソナ怪しい話はやめて下さい。ウンザリしちゃった」

「イヤ。今度の事件とは関係のない、全然別の話なんだ。何でもその歌ソプラノ姫を轟氏が可愛がっているお蔭で、兄貴までもが御厄介になっているらしいという、松井ヨネの話だがね」

「ウルサイ奴ですね。アノ飯めしたきおんな焚女は……」

「おお。女中といやあ今の小間使の市田イチ子もチョットういういしい、踏める顔だよ。紹介してやろうか。今に茶を持って来るから……」

「イヤ。モウ結構です。僕は帰ります」

「まあいいじゃないか。ユツクリし給え。君は女が嫌いかい」

「探偵小説があれば女は要りません」

「そんな事を云うもんじゃないよ。まあ見て行けよ。別べっぴん嬪の顔を……」

を……」

「イヤ。帰ります。お邪魔をするといけませんから……」

「アハハハハ。コイツはまいった……」

ちようどその時分であつた。呉服橋劇場五階に在る呉羽嬢の秘密休憩室で、呉羽嬢自身と、笠支配人とが向い合つて腰をかけていた。

その秘密休憩室というのは、平生劇場用の小道具等を蔵しまつておく五階屋根裏の大きな倉庫の片隅を、ボロボロになつた金屏風や、川岸の書割なぞで二間四方ばかりに仕切つて、これも小道具の塵ほ埃こりまみ塗れの長椅子と、歪いびつになつた籐椅子とういすを並べて、楽屋用の新しい座布団を敷いただけのもので、リノリウムの床とスレスレの半円窓の近くにカラカラに乾いた枯水仙の鉢が置いてあるのが、薄暗い裸電球の下で、そうした書割や金屏風と向い合つて、奇妙に

物凄い、荒れ果てた気分を描きあらわしていて、今にも巨大な一つ目小僧の首か何かが……ウワア……とそこいらから転がり出しそうな感じがする。

しかし、それでも女優の呉羽にとっては、華々しい楽屋よりもこの部屋の方がズツと落付いて、気分が休まるらしかった。劇場そのものの人気はあまり立たなかつたが、それでも彼女個人としての人気は、全国の女優群を断然抜いていて、三階の彼女の楽屋では訪問客を凌ぎ切れないために、彼女はよくこの物置の片隅の秘密室へ休憩に来るのであつた。

フロックコートの笠支配人はかなりの緊張した態度でイビツになつた籐椅子の上にかしこまっている。これに対した彼女は派手

な舞台用の浴衣ゆかた一枚に赤い細帯一つのシドケない恰好で、肉色の着込みを襟元から露わしたままかたわら傍の長椅子に両足を投出して、
が、モウ話に飽きたという恰好で、大きな古渡珊瑚こわたりさんごの簪かんざしを抜いて、大丸鬚の白い手柄の下を搔いていた。

「それじゃクレハさん。貴女あなたと轟さんの間には何も関係はないんですね。普通の関係以外には……」

呉羽は見向きもしなかった。

「何とでも考えたらいいじゃないの……イクラ云ったってわからない。どうしてソナナに執拗しつこくお聞きになるの。下らない事を……」

「下らない事じゃないんです。これには深い理由があるので……」

…その…その…その…」

「アツサリ仰言じきいよ。モウ直じき、次の幕が開あくんですよ」

「この次の幕は…です。貴女は、そのまんまの姿で出て、亭主役の寺本蝶二君に槍で突かれるだけの幕じゃないですか。まだ二十四五分時間があります」

「ええ。でもそれあ妾の時間よ。貴方のために取つてある時間じゃないわよ」

「恐ろしく手酷いのですな今夜は…下へ行くと新聞記者がワンサ待ちうけているんです。犯人の逮捕を警察で発表したらいいんですからね。どうしても僕じゃ承知しないんです。貴女あなたでなくちゃ…」

「新聞記者の方が五月蠅うるさくないわ。貴方の質問よりも……」

「そう邪慳よこしまに云うものじゃありません。だからよく打合わせとかなくちや……その……これはこの劇場の運命と重大な関係のある話なんですよ。この劇場の運命は貴女あなたの御返事一つにかかっていると云つてもいいんです」

「勿体振る人あたし嫌い……」

「いいですか……ビツクリしちや不可いけませんよ」

「余計なお世話じゃないの……ビツクリしようとしまいと……早く仰言うかがいよ」

「それじゃ云いますがね……貴女あなたはね……」

「あたしがね……」

「この頃毎晩女中が寝静まってしまつてから……轟さんの処へ押かけて行つて、結婚したい結婚したいって仰言るそうじゃないですか……ハハハ……どうです……吃驚びっくりしたでしょう……」

呉羽は見る見る中うちに硝子瓶ガラスのように血の気を喪つた。屹きつと身を起して笠支配人の真正面に正座して、唇をキリキリと噛んだまま睨み付けた。心持ち青味を利かした次の幕のメーカーヤツプが一層物凄く冴え返つた。カスレた声が切れ切れに云つた。

「……それを……どうして……知つてらっしゃる」

笠支配人は鬼気を含んだ相手の美しくしさに打たれたらしかつた。テラテラした脂あぶらが顔がおの光りを急に失くして、両手をわなわなと握合わせながら腰を浮かした。

「……そ……それは……ソノ……轟さんから聞きました。四五日……前の事です。轟さんは、思案に余つて御座つたらしく、私に二度ばかりコンナ話をされたのです。劇場ここの地下食堂で轟さんと二人切りになつた時です」

呉羽が深くうなずいた。すこし張合が抜けたらしかつた。

「あなたが探り出した訳じゃないんですね」

「そうです。轟さんから直接に聞いたのです。クレハは俺を見棄てて結婚しようと思つている。しかし俺はあのクレハをぬきを度外視してこの劇場をやって行く気は絶対がない。クレハの結婚は俺にとつて致命傷だ。俺はドンナ事があつてもクレハの結婚を許す気にならん……とこう云われたのです」

「……………」

「そうして昨日きのう、二人で自動車で出かける時に又コンナ事を云われたのです……クレハの奴、飛んでもない人間と結婚しようと思つている。あんな奴と結婚したら、クレハ自身ばかりじゃない俺までも破滅しなくちやならん。俺とクレハの一生涯の恥を晒さらすことになるんだ。今夜こそ彼女あいつの希望をドン底までタタキ潰つぶしてくる。たとい打うち殺ころしても二度とアンナ希望を持たせないようにするつもりだ……と非常に昂奮していられましたがね」

呉羽は笠支配人の話の中に、それこそホントウにタタキ附つけられたように椅子の中へ埋もれ込んだ。肩すばを窄すぼめて眼を伏せたまま深い深いふるえたタメ息をした。

「一体あなたがその結婚したいと仰言る相手は誰なのですか。私は直接に貴女あなたのお口から聞きたいのですが、ドナタなのですか一体……面白い相手ならば私も一口、御相談相手になって上げたい考えですがね」

「……………」

相手が参っている姿をマトモに見た笠支配人は、思わずニンガリと笑った。頬杖を突いて身を乗出したいところであつたらうが、テーブル卓子が無いので仕方なしに腕を組んでグツと反身そりみになつた。なおなお呉羽を脅やかして、勝利の快感に酔いたい恰好であつた。

「……仰言れないでしょうね。こればかりは……へへへ。しかしコチラにはちやんとわかっておりますよ。へへへ。お隠しになつ

ても駄目ですよ……あなたのお父さん……だか、赤の他人だか知りませんが轟九蔵さんはその時に、こんなような謎を云い残しておられるのです。そのクレハの結婚の相手というのがアンマリ意外なので俺は全くタタキ付けられてしまったんだ。ほかでもないあの脚本書きの江馬兆策の妹のミドリなんだ。つまり同性愛という奴で、あの女に対してクレハの奴がとても深刻な愛を感じているんだね。俺はこの頃、毎晩仕事に疲れて、アタマがジイインとなって、何もかも考えられなくなっているところへ、クレハの奴が又こんなような飛んでもない変テコな問題を持込んで来やがるもんだから、いよいよ考え切れなくなつて君に……つまり私にです……相談をかけてみるんだが、一体、俺はドウしたらいいん

だろう……クレハの奴は幼少ちいさい時から無残絵描きの父親の遺産を受けていると見えてトテモ片意地な、風変りな性格の奴であったが、その上にこの頃、あんな芝居ばかりさせられて来たもんだから根性がイヨイヨドン底まで変態になってしまっているらしいのだ。あのミドリさんと同棲して、お姉さんお姉さんと呼ばれて暮すことが出来さえすれば妾はモウ死んでも構わない。これを許して下されば妾は新しい生命に蘇って、モットモットすごい芝居を、モットモット一生懸命で演出して、今の呉服橋劇場の収入を三倍にも五倍にもしてみせる。そうしてミドリさんきょうだい兄妹を洋行させて頂けるようにする……今みたいな人間離れのしたモノスゴイ芝居ばかりさせられながら、何の楽しみも与えられない月日を送

つていと妾はキット今にキチガイになります。今でも芝居の途中で、そこいらに居る役者たちの咽喉のど笛に、黙って啖くいつ付いてみたくなる事がある位ですが、ホントウに啖くいつ付いてもよござんすか：
…つてスゴイ顔をして轟さんにお迫りになつたそうですね」

「……………」

「私はまだまだ色々な事を知っているのですよ。轟さんはズツト前からよく云つておられました。あのミドリ兄妹は放浪者だったのを轟さんが旅行中に拾つて来られたもので、兄に美術学校の洋画部を、妹に音楽学校の声楽部を卒業おさせになつたものですが、兄の方の絵はボンクラで物にならず、とうとうへボ脚本屋に転向してしまつたのですが、これに反して妹の美鳥ミドリの方はチョツト淋

しい顔で、ソバカスがあつたりして割に人眼に立たない方だけでも、よく見るとラテン型の本格的な美人で、しかも声が理想的なソプラノだ。もつともあのソプラノを一パイに張切ると持つて生れた放浪的な哀調がニジミ出る。涯しもない春の野原みたような、何ともいえない遠い遠い悲しさが一パイに浮き上るのが傷といえど傷だ。日本では現在、あんなようなクラシカルな声はやらが流行ないが、西洋に行ったら大受けだろう。俺はあの娘を洋行さしてやるのを楽しみに、ああやって家の庭うちの片隅に住まわせて、呉羽とも親しくさせているのだが、兄も妹も寸分違わない眼鼻を持つていながらに、どうしてあんなに甚しい美醜の差が出来るのか、見れば見る程、不思議で仕様がなない。もちろん兄貴の方がアンナ

に醜い男だから大丈夫と思つて油断していたら、思いもかけぬ妹の方へクレハの奴が同性愛を注ぎ初めたりしやがったので俺は全く面喰らつている……と仰言つたのですが、これはミンナ事実なのでしようね。へへへ」

「……………」

呉羽は辛うじて首肯うなずいた。笠支配人も一つゴツクリとうなずいて膝を進めた。

「一体貴女あなたが結婚したいと仰言るのは誰ですか。ハッキリ仰言つて頂けませんか。この際……」

「……………」

「アノ……アノ……作家の江馬兆策じゃないのですか」

「……………」

「どうも貴女あなたはあの男と心安くなさり過ぎると思つておりました
が……………」

笠支配人の態度と口調が、だんだん積極的になつて来るに連れ
て、呉羽はイヨイヨ長椅子の中へ頹折くずおれ込んで行つた。白手柄しろてがら
の大きな丸鬚まるまげと、長い髷たぼと、雪のように青白い襟筋をガツクリ
とうなだれて、見るも哀れな位萎れしおれ込んでいるのを見下した支配
人はイヨイヨ勢付いて、ここまでノシかかるように云つて来ると、
又もや呉羽は突然に真白い顔を上げた。眉をキリキリと釣上げて
ハネ返すように云つた。

「ケ……………穢けがらわしいわよツ……………ア……………アンナ奴……………」

「……でも……でも……」

笠支配人は度を失った。憤激いかりの余り肩で呼吸をしている呉羽の

見幕に辛うじて対抗しながら、真似をするように息を切らした。

「でも……でも……貴女あなたは……いつも御主人の眼を忍んで……あの劇作家せんせいと……」

「そ……それはあの凡クラの劇作家せんせいに、次の芝居の筋書を教えるためなのよ。次の芝居の筋書の秘密がドンナに大切なものか……ぐらいの事は、貴方だつて御存じの筈じゃありませんか。……ダ……誰がぁんなニキビ野郎と……」

そう云ううちに呉羽は見る見る昂奮が消え沈まつたらしく、以前の通り長椅子に両脚を投出した。今度は何やら考え込んだ、一

種のステバチみたような態度に変わってしまった。そうした態度の変化には何となく不自然な、わざとらしいものがあつたが、しかし笠支配人は満足したらしかつた。モトの通りに落付いた緊張した態度で、ジツと呉羽の横顔を凝視^{みつ}めた。

「それじゃ何ですね。貴女^{あなた}は、轟さんに結婚の希望を拒絶されて、立腹の余りに轟さんを殺されたんじゃないんですね」

呉羽はサモサモ不愉快そうに肩をユスリ上げて溜息をした。

「失礼しちやうわねホントニ。いつまで云つても、同じ事ばっかり……執拗^{しつこ}いたらありやしない。ツイ今先刻^{さつき}貴方と二人で大森署へ行つて、犯人に会つて来た計^{ばか}りじゃないの」

「ええ。ですから云うのです。犯人が貴女^{あなた}を見上げた眼が尋常じ

やなかつたように思うのです。双方から知らん知らんと云いながら、犯人が涙をポロポロ流して、済みません済みませんと頭を下げているのを見た貴女が、自動車に乗ってからソツと涙を拭いていたじゃないですか」

「ホホ。あれはツイ同情しちやつたのよ。犯人はどこかで妾に惚れていたかも知れないわ。コンナ女優業しょうばいですからね、ホホ。：：：そういえば貴方を犯人が見上げた眼付の恨めしそうで凄かつたこと。何かしら深い怨みがありそうだったわよ。知らん知らんとお互いに云いながら……」

「……そんな事はない……」

「だから妾もソナ事はない」

「そ……それじゃ話にならん……」

「ならないわ。最初から……貴方の仰言る事は最初から云いがか
りバツカリよ」

「云いがかりじゃありません。つまり貴女が結婚したいなんて仰
言ったのは、轟さんに対する何かの脅迫手段で、貴女の本心じゃ
なかったのですね」

「貴方はそう考えていらつしやるの」

そう云った呉羽の態度にはどこやら真剣なところがあつた。笠
支配人は太い溜息をした。

「ええ……そう考えたいのです。そう考えなければタマラないの
です」

「ホホホ。面白い方ね貴方は……そんな事が、どうしてこの劇場の運命と関係があるんですの」

「大いにあるんです」

笠支配人は急に勢付いたように坐り直した。颯爽たる態度で半身を乗出して、しなやかな呉羽の全身を見まわした。

「貴女も、もう相当に苦労しておられるんですからね」

「……さあ……どうですか……」

「呉羽さん……率直に云いましょうね」

「ええ。どうぞ……」

「僕と結婚してくれませんか」

呉羽は予期していたかのように、横を向いたまま、唇の隅で小

さく冷笑した。その凄艶とも何とも譬えたとようなないヒツソリした冷笑が、呉羽の全身に水の流れるような美しくしさを冴え返らせて行くのを見ると笠支配人は、思わずワナナキ出す唇を一生懸命で噛みしめた。ここが一生の運命の岐れ目わかと思ひ込んでいるらしい真剣味をもつて、今一層グツと身を乗出しながら、男盛りの脂あぶら切ぎった顔を光らした。

「ね。おわかりでしょう。僕の気持は……今、貴方から拒絶されると、僕はモウこの劇場に居る気がしなくなるのです。もうもうコンナ劇場こやもの関係生活だの、探偵劇だのには飽き飽きしているのですからね。天命を知ったとでも云うのでしょうか。モット落付いた、人間らしいシンミリとした生活がしてみたくてたまらなくな

っているのですからね」

「……………」

「但し……貴女が僕に新しい生命を与えて下さるとなれば問題は別ですがね」

呉羽は微かにうなずいた。ヒツソリと眼を閉じたまま……。

「……ね。おわかりでしょう。そうした僕の心持は……」

呉羽は一層ハッキリとうなずいた。

「ええ。わかり過ぎますわ」

「ね。ですから……ですから……僕と……」

笠支配人は青くなったり赤くなったりした。こうした場面によく現われる中年男の醜体を見せまいとしてハラハラと手を揉んだ

り解いたりした。

「ええ。それは考えてみますわ。女優なんてものはタヨリない儂はかない商売ですからね」

「エツ。それじゃ……承知して……下さる……」

「まッ……待つて頂戴よ……そ……それには条件があるので。

妾も……ネンネエじゃありませんからね」

呉羽は今にも自分に飛びかかりそうな笠支配人を、片手を挙げて遮り止めた。笠支配人は誰も居ない部屋の中を見まわしながら不承不承に腰を落付けた。

「そ……その条件と仰言るのは……」

「こうよ。よく聞いて下さいね。いいこと……」

「ハイ。どんな難かしい条件でも……」

「そんなに難かしい条件じゃないのよ。ね。いいこと……たといあなたわたし貴方と妾とが一所になったとしても、この劇場の人氣が今までの通りじゃ仕様がないでしょ。ね。正直のところそうでしょ。轟家うちの財産だって、もうイクラも残ってやしないし……貴方も相当に貯め込んでいらつしやるにしても遊びが烈しいからタカが知れるわ」

笠支配人は忽ち真赤になった。モウモウと湯気を吹きそうな顔を平手でクルクルと撫で廻した。

「ヤツ。これあ……どうも……そこまで睨まれてちゃ……」

「ですからさあ……妾だって全くの世間知らずじゃないんですか

ら、好き好んで泥濘ぬかるみを撰よつて寝ころびたくはないでしょ。ね。
ですから云うのよ。モウ少し待つて頂戴つて……」

「もう少し待つてどうなるのです」

「あのね。妾もね……この劇場こやにも、探偵劇しばいにも毛頭、未練なんかないんですけどね。折角、轟さんと一所に永年こうやって闘つて来たんですから、せめての思い出に最後の一旗を上げてみたいと思つてんの……」

「へエ。最後の一旗……」

「こうなんですの……きようは八月の四日、日曜日でしょう。ですから今日から来月の第一土曜、九月の七日の晩まで、丸つと一ひと月お芝居を休まして、座附の人達の全部を妾に任せて頂きたい

んですの。費用なんか一切あなたに御迷惑かけませんからね。妾はあの役者達ひとを連れて、どこか誰にもわからない処へ行つて、妾が取つときの本読みをさせるの」

「貴女あなたが取つときの……」

「ええ。そうよ。これなら請合いの一生に一度という上脚本キリフダを一つ持っていますからね。その本読みをしてスツカリ稽古を附けてから帰つて来て、妾の引退興行と、呉服橋劇場独特の恐怖劇の最後の興行と、劇場主轟九蔵氏の追善と、大ガラムに宣伝して、涼しくなりかけの九月七日頃から打てるだけ打ち続けたら、キット相当な純益もが残ると思いますわ」

「さあ……どうでしょうかね」

「いいえ。きつと這入^{アタ}つてよ。それにその芝居^{キリフダ}の筋^{ネタ}というのが世界に類例のない事実曝露の探偵恐怖劇なんですから……」

「事実曝露……探偵恐怖劇……」

「そうなのよ。つまり妾の一生涯の秘密を曝露^{バラ}した筋なんですから……これを見たら今度の事件の犯人だって、たまらなくなつて、まだ誰も知らない深刻な事実を白状するに違いないと思われるくらいスゴイ筋なんですからね……自慢じゃありませんけど……ホホ……」

彼女はスツカリ昂奮しているらしかった。白磁色の頬を火のよ
うに燃やし、黒曜^{こくよう}石色^{せき}の瞳を異妖な情熱に輝やかしつつ、彼女
の方からウネウネと身体^{からだ}を乗出して来たので、たまらない息苦し

い眩惑をクラクラと感じた支配人は、今更のようにヘドモドし初めた。相手の白熱的な芸術慾に焼き尽されまいとして太い溜息を何度も何度も重ねた。ハンカチで汗を拭き拭き慌て気味に問い返した。

「…………ド…………どんな筋書で…………」

「それは…………ホホホ…………まだ貴方に話さない方がいいと思うわ。

兎とに角かく一切貴方に御迷惑かけませんから貴方は今から九月の七日過ぎる迄、久振りに温泉か何かへ行って生命いのちの洗濯をしていらつ

しやい。タツタ一箇月かソコラの間ですから、その間中貴方は絶対に妾の事を忘れていて下さらなくちや駄目ですよ。さもないと将来の御相談は一切お断りしますよ。よござんすか。仕事は一切

私が自分でしますから……」

「出来ましようか貴女に……」

「一度ぐらいなら訳ありませんわ。小さな劇場こやですもの……いつもの通りの手順に遣るだけの事よ。チヨロマかされたってタカが知れてますわ」

「資金おかねはありますか」

「十分に在つてよ。在り余るくらい……」

「意外ですなあ……どこに……」

「どこに在つてもいいじゃないの……とにかく貴方は今度だけ御客様よ。招待券の二三枚ぐらい上げてもいいわ……ホホ……神戸の後家さんおやこ親娘でも引っぱってらっしゃい」

「ジヨ……冗談じゃない」

「そうよ。冗談じゃないのよ。真劍よ……妾……それまで処女を棄てたくないんですからね」

「シヨ……シヨジヨ……」

「まあ何て顔をなさるの。妾が処女じゃないとでも仰言るの。ずいぶん失礼ね」

「イヤ。ケ……決してソナ訳では……」

「そんならおとな溫柔しく妾の云う事をお聞きなさい。そうしてモウ時間ですからこの室を出て行って頂戴……」

事件当夜……八月四日の呉服橋劇場は、非常な不入りであった。

その日の夕刊を見た人々は皆、当然の休場を予想していたらしく、毎日の定収入になつてゐる御定連の入りすらも半分以下で、最終^{オオ}幕^{ギリ}の前に「当劇場主轟九蔵氏急死に就き勝手ながら整理のため向う一箇月間休場いたします」の立看板を舞台中央の幕前に出した時には、無礼にも拍手した奴が居た。

「ああ。もうこの芝居も、これでおしまいか」と云つて今更^{なごり}名残惜しげに表の絵看板を振返る者さえ居た。

その時にスター女優天川呉羽は、劇作家、江馬兆策と一所に銀座裏のアルプスという山小舎^{コーヒー}式の珈琲店の二階で、向い合つていた。白ずくめの洋装をした呉羽は中世紀の女王のようにツンとして……。タキシードの兆策はその従僕のように、巨大な木の切

株を中に置いて竹製の腰掛にかかっている。帳場の煤すすけたランプを模した電燈の蔭に、向うむきに坐つた見すばらしい鳥打帽の男がチビリチビリとストローを舐しゃぶつているほかには誰も居ない。部屋の中をチラリと見まわした呉羽は、切株のテーブルの上に肘を突いて兆策の耳に顔を近付けた。兆策も熱心にモジャモジャの頭を傾けた。低い声が部屋中にシンシンと途切とぎれ散る。

「江馬さん。よござんすか。これは妾の一生の秘密よ。今度、轟さんが殺された原因がスツカリわかる話よ」

「えッ。そ……そんな秘密が……まだあるんですか」

「ええ。トテモ大変な秘密なのよ。今月の十五日迄にこの秘密をアンタに脚色してもらって、来月の初め頃にかけて妾自身が主演

してみたいと思っっているんですから、そのつもりで聞いて頂戴よ」
「……かしこ……まりました」

「ですけどね。この話の内容は、芝居にすると相当物騒なんです
から、警視庁へ出すのには筋の通る限り骨抜きにした上演脚本あげほんを
書いて下さらなくちゃ駄目よ。興行差止チリンチリンなんかになったら、大損
をするばかりじゃない。妾の計画がメチャメチャになつてしま
うんですからね。是非ともパスするように書いて頂戴よ。もちろん
日本の事にしちやいけないの。西洋物のやきな翻案おしとか何とかい
う事にして、鹿爪しかつめらしい原作者の名前か何か付けて江馬兆策脚色
とか何とかしとけばいいでしょ。その辺の呼吸は万事おまかせし
ますわ」

「……しようち……しました」

「出来たら直ぐにウチの顧問弁護士の桜間さんに渡して頂戴……」

「支配人じゃいけないですか」

「ええ。妾の云う通りにして頂戴……笠さんじゃいけない訳は今わかりますから……」

「……で……そのお話というのは……」

「……もう古い事ですわ。明治二十年頃のお話ですからね。畿内の小さな大名植村駿河守するがのかみという十五万石ばかりの殿様の御家老の家柄で、甘木丹後あまきたんごという人の末ツ子に甘木柳仙りゆうせんという画伯えかきさんがありました」

「どこかで聞いた事があるようですな」

「ある筈よ。ホホ。柳りゅうせん遷せんとか柳りゅうせん川せんとか色々署名サインしていた
 ようですが、その人が御維新後のその頃になって、スツカリ喰い
 詰めてしまつて、東海道は見付みつの宿しゆくの等々とど力雷九郎という親分を
 頼つて来て、町外れの閑静な処に一軒、家うちを建ててもらつて隠棲
 しておりました。静岡、東京、名古屋、京阪地方にまでも絵を売
 りに行つて相当有名になつておりましたが、その中でも古い錦絵
 の秘密画とか、無残絵とか、アブナ絵とかを複写するのが上手で、
 大正の八九年頃には相当のお金を貯めて、小さいながら数奇すきを凝
 らした屋敷に住むようになっていたそうです」

「それで思い出しました。僕はその絵を見た事があります。たし
 か四条派だつたと思いますが……」

「ね。あるでしょう……その柳仙夫婦の間に、その頃三つか四つになる三枝という女の児こがありました。父親が五十幾つかの老年になって出来た子供なのでトテモ可愛がって、ソラ虫封じ、ソラ御開運様といった風に色々の迷信の中うちに埋めるようにして育てたものだそうですが、それがアンマリ利き過ぎたのでしよう。今の妾みたいな人間になってしまったのです」

「結構じゃないですか」

「……まあ聞いて頂戴……その大正の十年ごろ静岡あたりを中心にして東海道から信州へかけて荒しまわっていた殺人強盗で、本名を石栗虎太、又の名を生せいばん蕃小僧というのが居りました。生蕃みたいばんに山の中へ逃込むとソレツキリ捕まらない。人を殺すこと

を何とも思っていないところから、そう呼ばれていたのだそうです。その生蕃小僧がこの柳仙の一軒屋に眼を付けたのですね。：
：どうしてもモノにしようと思つて色々様子を探つてみたんだそうですね。：
うですが、その柳仙の一軒屋というのは、見付の人家から二三町も離れていて、呼んでも聞こえないばかりでなく、四方八方に森や、木立や、小径がつながり合つていて、盗賊かせぎには持つて来いの処だったのですが、しかし、何よりもタツタ一つ、一番恐ろしい番犬がこの柳仙の家をガツチリと護衛まもつていている事が、最初から判明かつていたのでした。：：：その番犬というのは見付の町で、土木の請負をやっている等々力親分の一家でした。

その頃見付の宿で、等々力雷九郎親分の後を嗣ついでいたのが等

々力久蔵という、生蕃小僧と同じ位の年頃の若い親分でした。もつとも大正十年頃の事ですから、昔ほどの勢力はなかったのでしょうか。そこいらの田舎銀行や、大百姓の用心棒ぐらいの仕事しかなかったのでしょうか。その上に、その若親分の久蔵というのも、昔とは違った帝大出の法学士で、弁護士の免状まで持っていたインテリだったそうですが、乾分こぶんに押立てられてイヤイヤながら渡世人の座布団に坐り、新婚早々の若い、美しい奥さんと二人で、街道筋を見渡していたものですが、この若親分の久蔵というのが、十手捕縄を預っていた雷九郎親分の血を引いたものでしょう。親分生活は嫌いながらにあの辺切つての睨み上手の、捕物上手で、云つてみれば田舎のシャロツク・ホルムズといったような名探偵

肌の人だったのでしよう。すこし手口の込んだ泥棒でも這入ると、警察より先に久蔵親分の処へ知らせて来るといふのです。流れ渡りの泥棒なんぞは、みんな等々力親分の縄張りを避けて通つた。ウツカリ久蔵親分の眼の届く処で仁義の通らぬ仕事なんかすると、警察よりも先に手を廻されて半殺しの目に会わされるといふ評判で、生蕃小僧にとつては、この久蔵親分の眼がイの一番に怖くて怖くてたまらなかつたのだそうです。

そこで生蕃小僧は意地になつてしまつて、どうしてもこの等々力巡査をノックアウトしてやろうと思つて色々と思恵を絞つたのでしよう。とうとう一つのスゴイ手を考え付いたので……ちよつと生蕃小僧という名前だけ聞くと人相の悪い、恐ろしい人間に

思えるようですが、それは刃物ドスが利くのと、脚力ノビが利くところを云つたもので、実は普通の人とチツトモ変らない男ぶりのいい虫も殺さない恰好で、おまけに腰が低くて愛嬌がよかつたもんですから行商人なんかになるとマルキリ本物に見えたそうです。ですから生蕃小僧はそこを利用してその頃流行はやつていた日本一薬館オッチニの家庭薬売ニに化けて大きな風琴を弾き弾き見付の町を流しまわつてゐるうちに、等々力の若親分の身のまわりをスツカリ探り出してしまいました。

……何でも等々力若親分の若い奥さんというのは、近くの村の百姓の娘で、持って生れた縹きりようよ緻美よしと伝法肌でんぼうはだから、矢鱈やたらに身じょうを持崩じょうしていたのを、持て余した親御さんと世話人が、情じょうを明か

して等々力の若親分に世話を頼んだものだそうですが、何ほ等々力の親分のお声がかかりでも、こればかりは貫い手が無いので、何となく顔が立たないみたいになつて来たものだそうです。そこで……ヨシキタ……そんなら一番俺がコナシ付けてくれよう。俺の傍そばへ引付けておいたら、そう無暗むやみに悪あがきも出来ないだろうというので、乾児こぶんたちの反対を押切つて、立派な婚礼の式を挙げたものだそうですが、これが等々力親分の一生の身の過あやまりでした。というのは、その若い奥さんの伝法肌というのが、若い女のチヨットした虚栄心が生んだ浅智恵から来たものだだったのでしよう。若親分から惚れられているなと思うと、早速亭主を馬鹿にしちやつて、主人の留守中に、何かしら近所の噂にかかるような事

をしていたのでしよう。ですから、そんな事を聞き出した生蕃小僧はスツカリ喜んじやったのですね。大胆にもオツチ二の金モール服のまま、他所よそから帰つて来る若親分を、町外れの草原くさはらで捕まえて面会したのだそうです。そうして奥さんの不行跡ふしだらを自分一人が知っている事のように洗いせら洗い並べ立てて脅迫しながら、済まないがここを暫くの間、眼をつむつてもらえまいか。稼とぎ高を山分けに致しますから……とか何とか厚顔あつかましい事を云つて、柔らかに固く相談をしますと、不思議にも若親分が、青い顔をして暫く考えた後のちに、黙つて承知したんだそうです。モトモト久蔵親分は、好きで渡世人になつた訳じゃないし、法律の一つも心得ているだけに、東京へ出て一旗上げたい上げたいと思いな

がら、因縁に引かれ引かれて足を洗いかねているところへ、最愛の女おかみさん房から踏み付けにされちやつたのですからスツカリ気を腐らしたのでしよう。そうして生蕃小僧に別れると直ぐに久蔵親分は、甘木柳仙の処を尋ねて、すみませんがモウお雛様がお片付きのようですから、御宅のお嬢さんを又、暫く私に貸して頂けますまいか。久し振りに抱だつこして寝たいですからと申込みました……久蔵親分は若い人に似合わない子供好きで、見付の子供は皆オジサンオジサンと云つて懐なついていたそうです。わけでもこの柳仙の処の子供は、特別に可愛がつていたせいでしよう。まるで親のように懐なついておりましたし、それまでも度々そんな事がありましたので、柳仙夫婦は快く子供の着物を着かえさしたりお菓子

や寢床まで風呂敷に包んで、若親分に渡してやったそうです。

……それから若親分は自宅へ帰ると、直ぐに乾児こぶんどもを呼集め、その大勢の眼の前に、若い奥さんと世話人を呼付けてアツサリ離別を申渡しましたので、二人ともグーの音ねも出ないで荷物を片付けてスゴスゴと田舎へ帰りました。それを見送った若親分は……ほんとに済まない事をした。俺の顔ばかりでなくお前たちの顔まで潰してしまった。俺はモウ決心を固めているのだからこの際何も云うてくれるなど云って乾児こぶんの中うちの一人に自分の席を譲り、その場で、お別れの酒宴を初めました。

……一方に柳仙夫婦の一軒屋へ生蕃小僧が忍び入って、夫婦と女中の三人を惨殺し、家うちじゆう中うちを引掻きまわして逃げて行つたの

は、ちようどそのあけがた曉方の事だったそうです。ところであいにく生憎か
仕合わせかわかりませんが、その時に柳仙の手許に在ったお金は
お小遣の余りの極く少しで、銀行の通帳や貴重品なんかは見付の
町に在った心安い貯蓄銀行の金庫に預けてありましたので、お金
以外の品物を決して盗らない事に行っている生蕃小僧にとつてはト
テも損な稼ぎだったのでしょう。ところが、それとはウラハラに
久蔵若親分はステキに、うまい事をしてしまいました。多分柳仙
のうち家に残っていたいんぎよう印形を利用するか何かしたのでしよう。そ
れにしてもドンな風ごまかに胡麻化したものか知りませんが、当然、そ
の娘のものになる筈の何万かの財産と、かなり大きな生命保険を
受取ると、そのまま行衛ゆくえを晦くらましてしまったものだそうです。

…ね…もうおわかりになったでしょう。柳仙夫婦がこの世に残したものの中でも一番大きい、美味おいしいことは、みんな久蔵若親分のものになってしまったのですからね…あとからこの事を知った生蕃小僧が、それこそ地団太を踏んで今の轟九蔵を怨んだのは無理ありませんわね。ですから轟がドンナに巧妙に姿を晦くらまして生蕃小僧はキツト発見みつけ出して脅迫して来るのでした。

俺が捕まったらキツト貴様も抱込んで見せるとか、当り前の復讐では承知しないぞ…とか何とか云っていたそうですが、しかし轟はセセラ笑っておりましきやつた。彼奴の怨みは藪睨みの怨みだ。俺は別に生蕃小僧をペテンにかけるつもりじゃなかつたんだ。ただお前が可愛くてたまらなかつたばかりに、万一の事が気にかかつ

てアンナ事をしただけの話なんだ。もちろん生蕃小僧がアンナに早く仕事にかかろうとは思わなかったし、奥さんの事を片付けてサツパリしてから柳仙に注意もしようし、手配もするつもりでいたんだから、柳仙夫婦が、あのまんま無残絵になってしまったのはやはり天命というものだったろう。

……柳仙が国禁の絵を描いている事はトツクの昔から睨んでいた。しかしイクラ忠告をしても止めないばかりでなく、県内の有力者の勢力なんかを利用して盛んに高価たかい絵を売り拵げて行くので、俺は実をいうとホントウに柳仙の厚顔あつかましさを憎んでいた。ナンノ柳仙を見付から追出すくらい何でもなかったんだが、ただお前の可愛さにカマケていたばかりなんだ。それから先の事は自然の

成なりゆき行で、大和の国に居る柳仙の親類なんかは一人も寄付かなかつたんだから仕方がない。生蕃小僧から怨まれる筋合いなんか一つもないばかりでなく、俺はお前を無事に育て上げるために、生命のちがけで闘わなければならぬ身の上になってしまった。俺が朝鮮に隠れてピストルの稽古をして来た事を、生蕃小僧が知っていなかったら、俺もお前もトツクの昔に生蕃小僧にヤツツケられていたろう。

……ところが、それから後のち、四五年経つと流石さすがの生蕃小僧も諦らめたと見えて、バツタリ脅迫状を寄越さなくなつた。彼奴あいつから脅迫状が来るたんびに俺はすこしずつ金を送つてやる事にしていったんだから不思議な事と思つたが、もしかすると自分の怨みが藪

睨みだったのに気付いたのかも知れない。それとも病気で死ぬかどうかしたのじゃないかと思うと、俺は急に気楽になって本当の活躍を初め、今の地位を築き上げたものなんだが、その十幾年後の今日こんにちになって突然に又生蕃小僧から脅迫状が来はじめたのだ。しかも俺にとっては実に致命的な意味を含んだ脅迫状が……」

「エツ……チヨチヨチヨツト待つて下さい」

江馬兆策は感動のあまり真白になった唇を震わした。

「そ……それもホントなんですか」

「ホホホ……みんな真ほんとう実なのよ。最初から……まだまだ恐ろしい事が出て来るのよ。これから……」

「……………」

「シツカリして聞いて頂戴よ。是非とも貴方に脚色して頂いて、大当りを取って頂きたいつもりで話しているんですからね」

「……………」

「…………その脅迫状というのは、最初は極く簡単なものだったので。一週間ばかり前に来たのは普通の封緘葉書で金釘流で『大正十年三月七日を忘れるな……芝居じゃないぞ』といっただけのものだったそうですが、それから後に二三回引続いて来たものは、相当長い文句のチャンとした書体で、とてもとても恐ろしい……私達の致命傷と云つてもいい文句でしたわ」

「…………ど…………ど…………ドンナ…………」

「ホホホ。アンタ気が弱いからね。そんなに紙みたいな色にならな

くたつていいわ。あのオ……チョイト……ボーイさん。ウイスキー・ソーダを一つ……大至急……」

江馬兆策はホツと溜息をした。顔中に流るる青白い汗をハンカチで拭いた。

「ホホホ。落付いてお聞きなさいよ。モウ怖いことなんかありませんからね。犯人が捕まって片付いちやつたアトなんですから……」

「でも……でも……まだ疑問の余地が……」

「ええええ。まだまだ沢山に在るのよ。モットモット大きな、深い疑問が残っているのを誰も気付かずにいるのよ。轟さんの心臓にあのナイフが突刺さつたホントの理由が、わかる話よ」

「エエツ。それじゃホントの犯人が……別に……」

「居るか居ないかは貴方のお考えに任せるわ。そこがこの脚本のヤマになるところよ。いい事……その長い脅迫状の文句はこうなのです。その脅迫状はあたし自分の部屋の鏡台の秘密の曳出ひきだしにチャント仕舞っているのですから、あとからお眼にかければわかるわ……轟九蔵と甘木三枝は、戸籍面で見ると親子関係になつていない。女優の天川呉羽は轟九蔵の養女でも何でもないのだから、つまるところ轟九蔵は甘木三枝の財産を横領している事になる。それのみか、轟九蔵と天川呉羽とは事実上の夫婦関係になつてい

る事を、俺は最近になつて探り出しているのだ。その上にその呉羽こと三枝という女は、ズット以前から劇作家江馬兆策と関係し

ている……」

「ワツ……ト飛んでもない……アツツ……」

江馬兆策は突然真赤になつて手を振つたトタンに、たつた今来たウイスキー・ソーダの飲みさしを切株のテーブルの上に引つくり返した。それを給仕が急いで拭こうとしたナプキンを慌てた兆策が引つたくつて拭いた。

「ホホホ。馬鹿ねえ貴方は……わかり切つてゐる事を妾の前で打消さなくたつていいじゃないの……ホホ……」

兆策はモウすっかり混乱してしまつたらしい。濡れたナプキンで上氣した自分の顔を拭き拭き給仕にソーダのお代りを命じた。しかし給仕は笑わないで、腰を低くして、うやうや恭しくナプキンを貰つ

て行つた。

「……ね。ですから妾あなたに考えて頂こうと思つてお話するのよ。貴方はいつてもソナ問題ばかりを研究していらつしやるんですから、妾の話をお聞きになつたらキット犯人を直覺して下さると思うのよ。轟九蔵を殺したのは生蕃小僧じゃない。あの支配人の笠圭之介……」

「エツ……ナ何ですつて……そんな事が……」

江馬兆策が中腰になつた。しかし呉羽は冷然と落付いていた。

「あたし……それが今日わかつたのよ。あの笠圭之介がね。ツイ今さっきの夕方の幕間に妾をあゝの五階の息つき場へ呼んでね。よもや誰も知るまいと思つていた脅迫状の中味とおんなじ事を云つ

て妾を脅迫したのよ。轟さんと妾の関係や貴方と妾の関係を疑つたような事を云つてね……ですから妾ヤツト気が付いたのよ、今捕まっているのはホンモノの生蕃小僧じゃない。ドツサリお金を掴ませられているイカサマの生蕃小僧で、公判になったらキツト供述を引っくり返すに違いない。だから本物の生蕃小僧はアノ支配人の笠圭之介……」

「フ——ム——」

江馬兆策が頭を抱えて椅子の中に沈み込んだ。眼をシツカリと閉じて、モジャモジャした頭の毛の中へ十本の爪をギリギリ喰い込ませた。

「……ね……こんな事があるのですよ。今もお話した通り、生蕃

小僧の脅迫状が来なくなつてから轟がホントウに活躍を初めたのが大正十四年頃でしょう。それからあの呉服橋劇場を買つたのが昭和三年の秋ですから、その間に三四年の開きがあるわけでしょう。その間に生蕃小僧が悪い仕事をフツツリと止めて、あの呉服橋劇場の支配人になり済ますくらいに余裕はチャントあるでしょう。生蕃小僧があんなにムクムクと肥つて、丸きり見違えてしまつている事も、考えられない事じゃないでしょう。そこで生蕃小僧は上手に轟さんに入るか、又は影武者の生蕃小僧に脅迫状を出させるか何かしてあの劇場こやを買わせたのよ。そうしてあの劇場の経営を次第次第に困難に陥れて、轟さんの爪を剥いだり、骨を削つたりしながら待つてうちいる中に、妾が年頃になつたのを見澄ま

して轟さんを片付けて、タツタ一人になった妾を脅迫して自分のものにしようたくと巧たくらんだ……と考えて来ると、芝居としても、實際としても筋がよく透るでしょう。何の事はない新式の巖窟王よ……ね……」

「……………」

「その中でタツタ一つ邪魔じやまつけ気なのは貴方です。江馬さんです……ね。貴方は天才的な探偵作家ですから普通の人だったら夢にも想像出来ない事をフンダンに考えまわしておられる方です。ですから万一、今のようなお話をお聞きになった暁には、いつドンナ処から自分の正体を看破みやぶられるかわからない。警戒の仕様が無いでしょう」

「……………」

江馬兆策は頭の毛を掴んだままソツと両眼を見開いた。その両眼は重大な決心に満ち満ちた青白い、物凄い眼であった。わななく指をソロソロと頭から離して、そこいらを見まわすと、ウイスキー曹達ソーダに濡れた切株の端に両手を突いて立上った。呉羽の希ギリシ臘型ヤの鼻の頭をピツタリと凝視して徐ろおもむに唇を動かした。

「……貴女は名探偵です……」

呉羽も調子を合わせるようにヒツソリとうなずいた。大きな眼をパチパチさせた。

「……ですから……貴方をお願いするのです。今から笠支配人の様子を探して下さい。そうしてイヨイヨ生蕃小僧の本人に違いな

いという事がわかったら……」

「……コ……殺してしまいます」

江馬兆策の両眼が義眼いれめのように物凄くギラギラと光った。

「イケマセン」

呉羽は真剣に手を振った。

「……ナ……ナゼ……何故ですか」

「復讐の手段は妾に任せて下さい。両親の仇かたき……轟の仇です……」

「……」

「それでね貴方にその脅迫状の束を全部みんなさし上げます。それをイ

ヨイヨとなったら笠に突付けて云って御覧なさい。お前はお前の

書いた文句を忘れてやしまい。呉羽さんを脅迫した言葉も忘れて

やしないだろうって……ね……」

「……………」

「それからね。貴方の活躍の期限を来月の十日までに切っておきます。来月の十日になつても笠に泥を吐かせる事が出来なかつたら一先ず帰つていらつしやい。よござんすか。費用は脅迫状の束と一緒に、明日あすの午後に差上げます」

「イヤ。費用なんか一文も要りません」

「いいえ。いけません。他人の間は他人のようにしとくもんです」
「エツ……他人……」

「ええ。そう。今じゃ全くの赤の他人でしょう。ですからそのつもりでいらつしやい。それからの御相談は、何もかも来月の十日

過すぎにお願いしますわ」

ハツと感激に打たれた江馬は深海魚のように眼を丸くして呉羽の顔を凝視した。口をアングリと開けて棒立ちになつていたが、やがてクシヤクシヤ頭をガツクリとうなだれると、涙をポトポトと落しながら口籠もつた。

「かしこ……まりました」

そうして、なおも感激に堪え切れないらしく、兵隊のようにクルリと身を翻すと、非常な勢いでホールを出て行つた。百雷の落ちるような凄じい音を立てて階段を駆け降りて行つた。

「……ホホ……確証を掴んだシャロツク・ホルムズ……義憤に駆られたアルセーヌ・ルパン、ホホホホハハハハ……」

星だらけの空を真黒く区切った檜の木立の中に燈火を消した轟家は人が居るか居ないか、わからない位ヒツソリとしている。表門に貼付けた「不幸中に付家人一切面会謝絶」と書いた白紙が在るか無いかの風にヒラヒラと動いているきりである。

これに反してお庭の隅の常春藤きづたに蔽われたバンガロー風の小舎には燈火ともしびがアカアカと灯ともつて、しきりに人影が動いている。

非常な勢いで帰つて来た江馬兆策が、妹の出したお茶も飲まない無言のまま、ガタンピシンと戸棚を引開けて、あらん限りの服、帽子、靴、ズボン吊、トランクを引ずり出して旅支度を初めたのを、妹の美鳥みどりがしきりに心配して止めているのであった。

「まあ……お兄様だったら……気でもお違いになったの……」

「感謝コオマプソ 感謝コオマプソ。心配しなくたっていいんだ。気も何も違つてやしない」

「だってイツモのお兄様と眼の色が違うんですもの……まるで確証を握ったシャロツク・ホルムズか義憤に猛り立つアルセエヌ・ルパンみたいよ。ホホホ。どうなすつたの……一体」

「黙って見てろつたら。非常な重大事件だから……お前がが関係しちゃイケナイ問題なんだから絶対に局外中立の態度で、黙って見てなくちやイケナイ重大事件なんだからね」

「わかつててよ。それ位の事……轟うちさんのお家の事でしょう」

「そうなんだよ。ホントの犯人がわかりそうなんだよ。そいつを

僕が突止める役廻りになつたんだよ」

「だからウイスキー曹達を、お引つくり返しになつたの……」

「ゲツ……お前見てたのかい」

「ホホホホ。ビックリなすつたでしょ」

兆策は自然木の椅子にドツカと尻餅を突いた。気抜けしたように溜息をして取散らした室内を見まわすと、醜い顔に不釣合な大きな眼をパチパチさせた。

「……ど……どうして聞いたんだい。タツタ今帰つて来たばかりなのに……」

美鳥は淋しく笑いながら向い合つた椅子に腰を降ろした。

「何でもないことよ。妾だつて今度の轟さんの事件ではずいぶん

頭を使っているんですもの。ホントの犯人が誰だか色々考えているうちに、万一貴方が疑われるような事になったらドウしようと思つて一生懸命に考えまわっていたのよ」

「フーン。どうして二人に嫌疑がかかるんだい」

「お兄さん御存じないの。昨夜十二時頃、轟さんと呉羽さんが、支配人の眼の前で大喧嘩をなすつた事を……」

「知らなかったよ。俺はその頃お前と二人で、ここで茶を飲んでいたんだから」

「ええ。そうよ。ですから妾も知らなかったんですけどね。小間使のイチ子さんが今朝けさになつて、その事をおヨネさんに話したんですつて……そうしたらおヨネさんがビックリしちゃつてね。そ

の喧嘩の話は決して喋舌^{しゃべ}つちやイケナイって云ってねあの女^{ひと}、自分^{自分}がオセツカイのお喋舌^{しゃべり}のもんですから、イチ子さんにシツカリと口止めをしといてから、わざわざやって来てソツと私に知らしてくれたのよ。こちらでも気^けぶりにも出さないようにして下さいね。おかアしな女^{ひと}よ。おヨネさんたら……ホホホ。あたし最初、何の事だかわかんなかったわ」

「ああ。その話かい。今朝^{けさ}、台所で暫くボソボソやっていたのは……一体何の喧嘩だい。轟さんと呉羽さんと言い争った原因というのは……」

「妾たち二人を追い出すとか出さないとかいう話よ」

「ナニ……俺たちを追い出す……?……」

「ええ。そうなんですって。何故だかわかんないんですけど」

「……ケ……怪けしからん。俺は今まであの轟をずいぶん助けてや
っているのに……」

「……そんな事云ったって駄目よ。御恩比べなんかすると馬鹿に
なつてよ」

「馬鹿は最初から承知しているんだ。向うはホンの些ちっとばかりの
金を出してくれたただけだ。それに対してこちらは、お金で買えな
い天才を提供しているじゃないか。しかも有らん限りの生命いのちがけ
で……」

「お兄さん馬鹿ね。そんな事云ったって誰も相手にしやしません
よ」

「一体ドツチが俺たちを追い出すと云うんだ」

「轟さんが追い出すって云うのを呉羽さんが、理由なしにソナ事をしてはいけないうってね。泣いて止めていらつしたそうよ」

「当り前だあ」

「当り前だかドウだか知りませんがね。もしソナ話があつたのを妾たちが聞いたつて事が警察にわかつたら大變じゃないの。お兄さんの極端に激昂し易い性格は、みんな知っている事だし、あの家の案内は残らず御存じだし……万一、疑いがかかつたら大變と思つてね妾ずいぶん心配したのよ」

「馬鹿な……俺はソナ馬鹿じゃない」

「だって今みたいに昂奮なさるじやないの……話がわかりもしな

い中うちに……」

「……ウウン……それあ……そうだけど……」

「……ね……ですから妾は直ぐにアライバイの説明の仕方や何かについて考えたわ。……ずいぶん苦心したことよ」

「そんな事は苦勞する迄もないじゃないか。昨夜ゆうべはチャントここに寝てたんだから……」

「まあ。そんなアライバイが成立する位なら苦心しやしないわ。お兄さんたら探偵作家に似合わない単純な事を仰言るのね。でもその寝ていらつしやるところを誰か他所よその人が夜通し寝ないで見ていなくちや駄目じゃありませんか。妹の妾が証明したんじや証明にならないんですからね。それ位の事は御存じでしょう。貴方だ

つて……」

「ウム。そんならドンナアリバイを考えたんだい」

「それがなかなか考えられないのよ。ですからね。今夜、貴方がお帰りになったら、よく相談しましょうと思つて待つていたら、イツモの十一時になつてもお帰りにならないでしょ。劇場の方へ電話をかけてみたら、もうお芝居はトツクにハネちやつて、呉羽さんと二人でお帰りになつたつて云うでしょう。ですからテツキりあのアルプスに違いないと思つて電話をかけたならテツキりなんでしょう。ですからその電話に出たボーイさんに頼んであすこの受話機を……ちようど貴方の背後うしろに在る木の空洞うつつろの中の卓上電話を外しつ放しにして受話機を貴方の方に向けておいてもらったの

よ。ですから貴方と呉羽さんのお話が何もかも筒抜けに聞えたのよ。あの家はいつもシーンとしているんですからね」

「エライツ。名探偵ツ……握手して下さいッ」

「馬鹿ね。お兄さま……あの女の云う事、信用していらっしやるの……」

「あの女ひとつて誰ひとだい」

「誰あの一ひとつて彼女以外に誰も居なかつたじやないの……」

「呉羽さんが僕と結婚してもいいって話かい」

「ええ。あれは絶対に信用なすっちゃ駄目よ」

「エツ……どうして……」

「どうしてつたつて呉羽さんは、お兄さんと結婚してもいいって

事をハッキリ仰言りやしなかつたわ」

「……………」

兆策は額を押えて椅子に沈み込んだ。

「フ——ム。そうかなあ……………」

「そうよ。彼女のあのひと話は陰影がトテモ深いんですから、用心して聞かなくちや駄目よ。たといソナ事をハッキリ仰言つたにしても、それあ嘘よ……………キツト……………」

「どうしてわかるんだい。そんな事が……………お前に……………」

「女の直観よ。……………第三者の眼よ……………」

「それだけかい……………」

「それだけでも十分じゃないの。あたし……………あの呉羽ひとつて女……………」

キット深刻な変態心理の持主だと思うわ」

「直感でかい」

「いいえ。色んな事からそう思えるのよ。第一あの女は貴方がホントに好きなんじゃない。妾が好きなのよ……それも死ぬほど……」

「ナ何だつて……真実かいそれあ……」

兆策は飛上らんばかりにして坐り直した。

「シツ。大きな声を出しちや嫌よ。外に聞こえるから……ホントなのよ。間違いないのよ。あの女は、妾と近しくなりたいために、お兄さんと心安くしていらつしやるのよ。あの女がお兄さんを見送っている眼と唇に気をつけていると、トテモ他所他所しい冷め

たさを含んでいるのよ。お兄さまを冷笑してるとしか思えない事さえあるわ。あたし何度も何度も見たわ」

兆策は血の気の失せかけた頬と額を、新しいハンカチでゴシゴシと力強く拭いた。

「フーム。それじゃ、お前を好いている事は、どうしてわかったんだい」

「あたし、お兄さんの前ですけどね。あの女がこの頃、怖くて仕様がなのよ。……あの女はね。妾を好いていると云った位じゃ足りないで、心の底から崇拜しているらしいのよ。トテモおかしいのよ。妾がズット前にあの女の部屋に忘れて行った黄色いハンカチを大切に仕舞っておいて、何度も何度も接吻してんのよ。妾

が偶然に行き合わせた時に、周章あわてて隠しちやっただんですけど、そのハンカチにあの人の口紅のアトが残ってベタベタ附いているのが見えたわ」

「ウフツ。気色の悪わるりい……ホントかいそれあ」

「お兄さんに嘘を吐ついたって仕様がないうじゃないの。いつでもあの女ひとの妾めかけを見ている眼の視線は、妾の横頬よこほにジリジリと焦げ付くくらい深刻なのよ」

「へエツ。驚いたね。それじゃ……つまり同性愛だね」

「そんなものらしいのよ。持って生まれた性格を舞台の上でイタメ附けられている荒すさんだ性格の人に多いんですってね。呉羽なわばらさんなんか尚なほ更さらそれが烈しいのでしよう。ですから妾……お兄さん

の事さえなければこの家を逃出うちそうと思つた事が何度も何度もあるくらい気味が悪かつたんですけどね……ロツキー・レコード会社から専属になつてはドウかつてね、或る親切な人から何度も何度も云つて来ているんですけど、断つちやつてジイツと我慢し通してんのよ」

「馬鹿……何だつて断るんだ。そんな美味うまい口を……」

「だつて妾が二百円取つてお兄様を養うよりも、妾がお兄さまの百円の御厄介になつてゐる方が嬉しいんですもの……」

「うむ。そうかつ……感謝するよ……」

兆策はモウ眼を真赤にしていた。

「でも……トテモ息苦しいのよ。だつて同性愛なんて日本にだけ

しかない事でしょう。朝鮮おくにではソナ話、聞いたこともないんですから、ドウしたらいいのかわかんないんですもの。呉羽さんと同じ位に妾が呉羽さんを好きにならない限り、どうする事も出来ないじゃないの。女蛇に魅入られたようなタマラナイ気持になるだけよ。それがトテモ底強い魅力を持って迫って来るんですから尚なおさら更、息苦しくなつて来るのよ」

「手紙も何も来ないのかい呉羽さんから……」

「イイエ。そんなもの一度も来たことないわ。妾が現実にそう感じているだけなの」

「フ——ム。そうすると……どうなるんだい……ボ……僕は……」

「アラ泣いていらつしやるの……お兄様は……」

「泣いてやしないよ。怖いんだよ。僕は……」

「チツトモ怖いことないわ。お兄様はただあの女ひとに欺ひかれていらつしやればいいのだわ。あの女ひとは、まだ轟ととさんを殺した犯人について疑うつていらつしやるのでしよう……ね……そうでしょう。ですから貴方に頼んで探してもらおうと思つていらつしやるんですから、その通りにしてお上げになつたらいいでしょう」

「何だか訳がわからなくなつちやつた。つまり僕はあの女ひとの云いうなりになつていればいいんだね」

「ええ。そうよ。こつちがあひとの女ひとを疑うっているソブリうちなんかチツトも見せないようにしてね。そうしていらつしやる中うちにはヒョツトしたらあひとの女ひとだつて、お兄様をお好きにならないとも限かぎらない

わ」

「タヨリないなあ。お前の云う事は……モット確しつりした事を云つとくれよ」

「だって将来さきの事なんかわかんないんですもの……貴方みたいに正直に、何もかも真まに受けて、青くなったり、赤くなったり……」

「オイオイオイ。電話で顔色がわかるかい」

「アラツ。バレちやったのね。トリツクが……」

「トリツク。何だいトリツクって……」

「ホホホ。何でもないのよ。あたし今夜あなたのアトから直ぐに家うちを閉めて出かけたのよ。だってコンナ時にはトテモたった一人でお留守番なんか出来ないんですもの。家うちの中には貴方の原稿以

外に貴重品なんか一つも無いでしょう。……それからね。序ついでに途中で寄道をしてロッキー・レコードへ寄つて契約して来ちやつたわ。一個月二百円で……」

「ゲエツ。ほんとかい……それあ……」

「ええ。だつて轟さんが死んじやつたら妾たちだつて相当の覚悟をしなくちゃならないでしょう。契約書見せましようか……ホラ……」

「ウウムム。ビックリさせるじゃないかヤタラに……」

「世話してくれた人トテモ喜んでたわ。妾の声は西洋人がヤタラに賞めるんですつてさあ。この間テストした時に……ですからモウ誰の世話にならなくとも大丈夫よ。轟さんから受けた御恩を呉

羽さんにお返しするだけよ」

「お前はたしかに俺より偉いよ。今夜という今夜こそ完全にまいった」

「ホホホ。まだエライとこ在るのよ」

「ナナ何だい一体……」

「当てて御覧なさい」

「わからないね」

「さっきの電話の話ウソよ」

「ヘエツ。何だつて……」

「アラツ。まだわかっていらつしやらないのね」

「だって、まだ何も聞きやしないじゃないか、トリツクの事……」

「自^じ烈^れ度^たいお兄^{にい}さんたら^らないわ。あのね……あたし今夜^{よる}貰^{もら}った契^{せき}約^{やく}の前^{まへ}金^{かね}で変^へ装^{そう}して今夜^{よる}のお芝^{しば}居^い見^みに行^いったのよ。そうして貴^{あなた}方^{かた}と呉^{くれ}羽^うさんのアトを跟^つけてアルプスへ行^いって、お二人^{ふたり}の話^{わたり}を横^{よこ}からスツカリ聞^きいてたの……鳥^{とり}打^う帽^{ぼう}を冠^{かぶ}って色^{いろ}眼^{がん}鏡^{きやう}をか^かけて、レイ
ンコート^{ラインコート}の襟^{えり}を立てて煤^{すす}けたラムプ^{ランプ}の下^{した}にいたから、わからな
か^かった筈^{はず}よ。あすこのマダムは^はやっぱり朝^{あさ}鮮^{せん}の^おく^{くに}人で、ズツト前^{まへ}から
心^{こころ}安^{やす}い^いのよ。ロッキー・レコー^{レコード}ド^ドの支^し配^{はい}人^{ひと}の第^{だい}二^に号^{ごう}なんですから
ね。今^{いま}度^どの話^{わたり}もあ^あのマ^マダ^{ダム}ム^ムが世^よ話^わして^{して}く^くれ^れた^たのよ」

「驚^{おど}いた……驚^{おど}いた……驚^{おど}いた……」

「まだビツクリな^なさ^さる^る事^{こと}があ^あつ^つて^てよ。あ^あの笠^{かさ}つ^つて^てい^いう^うお^お爺^{ぢい}さん^{さん}ね」
「可^あ哀^いそ^そう^うに、お^お爺^{ぢい}さん^{さん}は^は非^ひ道^どい^いよ」

「あの笠圭之介って人を貴方はホントの犯人と思つていらつしやる？」

「さあ。わからないね。当つてみない事には……」

「そう。それじゃ当つて御覧なさい。あの人ならお兄様に対して無暗むやみな事はしない筈ですから……」

「何だいまるで千里眼みたような事を云うじゃないかお前は……事件の真相を残らず知つてゐたいじゃないかお前は……」

「ええ。知つてるかも知れないわ……でも、それは今云つたら大変な事になつて、何もかもわからなくなるから、云わない方がいいと思つてわ」

「ふうむ。そんなに云うなら強しいて尋ねもしないが、しかしその

わかったって云うのは、犯人に関係した事かい……それとも事件全体に……」

「ええ。そう事件全体の一番ドン底に隠されている最後の秘密よ。トテモ神秘的な……そうして芸術的にも深刻な秘密よ。それさえハッキリとわかれば妾は自分の一生涯を棄てても、その秘密の犠牲になって上げていいわ」

「オイオイ。物騒な事を云うなよ……オヤツ。美^みいちちゃん……泣いているのか」

「……だって……アンマリ可哀そうなんですもの……その秘密の神秘さと、芸術的な深さの前には妾の一生なんか太陽の前の星みたいなんですもの……」

「いよいよ以て謎だね」

「ええ。どうせ謎よ。この世の中で一番醜い一番美しい謎よ。それさえ解れば今度の事件の真相が一ペンにわかるわ」

「いよいよわからないね。何だか知らないけど、わからない方がよさそうな気がする」

「ええ。妾もよ。わかつたら大変よ」

「いったいいつからソナ事を感じいたんだい」

「ヤツト今夜感付いたのよ。あの女と貴方ひとのお話を聞いているうちに……」

「……ど……どんな事だい。それは……」

兆策が突然に立上った勢がアンマリ凄まじかったので、妹の美

鳥も思わず立上ってしまった。そうして少し涙ぐんだまま頬を真赤に染めた。

「あの女ひとがね……貴方と向い合つて話している横顔を、暗いところからコンパクトの鏡に写してジイツと見ている中うちに、妾、胸がドキドキドキして来たのよ……鏡つてもものは魔者ね……やっぱり……」

兄妹は見る見る青ざめて行く顔を見合わせた。

「ふうん。どうして胸がドキドキしたんだい」

美鳥はいよいよ涙ぐんだようになって、うつむいた。紅茶を入れかけたままの白いエプロンの端をもてあそび弄び弄び耳まで赤くなつてしまった。口籠もり口籠もり云った。

「呉羽さんはアンマリ……アンマリ美し過ぎると思ったの……」

あくる日も引続いた上天気であつた。

夜が明けると、思い切つて早起して、いつもの通りに凝こつた和装の身支度を済ました女優呉羽嬢は、直ぐに轟家の顧問弁護士、桜間法学士を呼付けた。既に自分の名前になつている自宅の建築と地面を抵当に入れて堀端銀行から一万八千円の金を引出し、その中から三千円を分けて江馬兄きょうだい妹を呼出し、桜間弁護士立会の上で手渡ししてキチンとした受取を入れさせた。それから弁護士を除いた三人で桐ヶ谷の火葬場にタクシーを乗付け、轟九蔵氏の遺骨を受取つて来て故人の自室に安置し、附近の寺から僧侶を

招いて読経してもらった。

焼香の時に一番先に仏前に立った呉羽は、長い事手を合わせて、何か口の中でブツブツと祈りながら肩を震わして泣いていたが、その態度がアンマリ真剣だったので江馬 兄きょうだい 妹は勿論、女中のおヨネまでも眼を潤ませていた。ところが故意か偶然かわからなけれども、そのおしまいがけになって呉羽の祈っている眩やき声に、何とも云えない気味の悪い底力が這入って来て、シンとした西洋室まの中にハッキリと沁しみ透り初めたので皆真青になって顔を見合わせた。

「……何もかも……貴方も……わたくしも……二十年前から間違
つて来ておりました……わたくしは、それを自分の手で公表さし

て頂きとう御座います……正しい姿に改めさせて頂きとう御座います……すべての間違つた恩も怨みも……一掃さして頂きとう御座います……どうぞ成仏なすつて下さい……南無阿弥陀仏……」

それから彼女は、まだ僧侶達が帰らない中に呼びつけのタキシ
ーの高級車を呼んで、弦を離れた矢のように飛出て行つた。一直
線に帝国ホテルに乗付けて、東洋一の興行師と呼ばれているトキ
ワ興行社長の段原万平氏に面会し、呉服橋劇場をタツタ五万円
で来る九月十日限り売渡す約束をしてしまった。

それから呉羽は又一直線に自宅に引返して桜間弁護士を自分の
寢室に呼寄せ、留守の事や契約の事なぞを色々細かに頼んで後、
呉服橋劇場専属の俳優二十七名の中から選出した男女優僅に十余

名を眼立たぬように変装させて、コッソリと上野駅を出発し、どこへか姿を消してしまったという事が、轟氏殺害犯人の逮捕に引続いて各新聞に報道され、満都の好奇心を聳しやうどう動どうした。しかし、それもホンノちよつとの間の事で、世間の人はいつの間にかそんな事を忘れるともなく忘れていた。

とはいえ呉服橋劇場の探偵劇と異妖劇の味を心から愛好していた一部の尖端都会人は、事実、火の消えたような淋しさを感じていたらしい。折ふし場末の活動館にかかった面白くも何ともないドイツ独逸の怪奇映画「笑う心臓」というのが連日、割れるような大入りドイツりを占めたのを見ても、そうした怪奇モノに飢えている都会人の心裡がアリアリと裏書きされていた。実際、敏感な文壇の人々や

劇評家、芸術家の中には「呉服橋劇場を救え」とか「邪妖劇と都会人」とか「怪奇劇と女優」とかいったような「クレハ嬢礼讃」を中心とする文章を来月号の雑誌に投稿すべく、熱心に執筆していた人々も、実際に居たのであつた。ところが、こうした一種の純真な意味の都会人の憂鬱は、それから間もない一箇月目に物の美事に粉碎されてしまった。東京市中でも有力な十大新聞の九月四日の朝刊の全面広告を見た人々は皆アツと驚かされたのであつた。

その全面広告の中央には五寸四方ぐらいの呉羽嬢の丸鬢姿の写真が、薄い小さな唇の片隅から白い歯をすこしばかり洩らした、妖美な笑いを凝固させており、その周囲に一寸角から初号、一号

活字ぐらゐの赤や黒の大活字が重なり合つて踊りまわつていた。

「呉服橋劇場蘇える」 「新劇場王天川クレハ嬢主演」 「邪妖探偵

劇——二重心臓」 「原作エドガア・アラン・ポーの秘稿」 「最近

仏国巴里市場に於て二百万法を以てグラン・ギニョール座専属。パ

オロ・オデロイン夫人の手に落札せられしもの」 「斯界第一人者

江馬兆策先生翻案脚色」 「凄絶、怪絶、奇絶、快絶、妖美無上」

「九月七日午後五時開場六時開演」 「特等（指定）十円」 「普通

五円、三円、前売せず」等々々……それから中一日置いて六日と

七日の朝刊には又、奇妙な事に、都下著名新聞の「轟氏殺害事件」

に関する記事を一々抄録して掲載し、その最下段に四号活字で次

のような説明を付けていた。

「諸君はこの劇を見る前に想起して頂きたい。今日から約一箇月前の八月三日の夜、前当劇場主を殺害した不思議な犯人のこゝとを……。その当時、敏捷なその筋の手配により、事件後数時間を出でずして捕まった犯人生蕃小僧こと、本名石栗虎太は、まだ轟氏殺害の理由について一言も供述せず、従つて一切はまだ巨大な疑問符の蔭に蔽い隠されている現情であるが、偶然にも当日興行される大天才ポー原作の『二重心臓』に用いられている物凄いトリックは、創作後百年を経過した今日に於て、この満天下を震駭した犯行の大疑問符を、遺憾なく抹消するに足る意外千万な鍵を指示している事を筆者は明言して憚らない者である。復活呉服橋劇場第一夜の演題にこの神秘邪妖探偵劇

『二重心臓』を筆者が推選した理由は実に懸ってこの一事に潜在しているので、現代社会の裏面の到る処に波打っているであろう邪妖怪『二重心臓』の鼓動が、如何にしてこの奇怪なる大犯罪事件を描き現わしたかという真相、経過を諸君の眼前に展開しあらわす時、諸君の脈搏を如何に乱打させ、諸君の血管を如何に逆流させ、全身を粟立たせ、頭髪を竦しよりりつ立せしめるであらうか。凄愴感、妖美感に昏睡せしむるであらうかは、筆者の想像の及ぶところでないであろうことをここに謹んで付記しておく。九月 日

江馬兆策識

なおそうした記事の中央に在る血潮の滴る形をした真赤なぎもん？

符ふの輪の中に髪を振乱した呉羽嬢がピストルを真正面に向けて高笑いしている姿が荒い網目版で印刷してあつた。

「まあ。お兄さま」

「おお。みいちゃん美鳥。御機嫌よう」

「まあ……今夜の入場者いりやうりやタイヘンじゃないの。コワイみたいじゃないの——」

「ウン。呉服橋劇場空前のレコードだよ」

「あたし此席こゝへ来るのに死ぬ思いしてよ。正面の特等席で云つたんですけど、入口から這入ろうとすると押潰されそうになるんですもの。ヤツト寺本さんに頼んで楽屋口から入れてもらったのよ

……ああ暑い……ずいぶんお待ちになって……」

「イヤ。ツイ今しがたここへ来たんだ」

「あら。お兄様ずいぶん日にお焼けになったのね」

「ヤツト気が付いたのかい。フフフ。これあ温泉焼けだよ。紫外線の強いトコばかり廻っていたからね。お前は元気だったかい」

「ええ。モチよ。あたし四五日前から神戸に行つたのよ。そうして今朝、家へ帰つてから、貴方の電報を見てビツクリしてここへ来たのよ」

「神戸へ何しに行つたんだい」

「それが、おかしいのよ。六甲のトキワ映画ね。あそこから大至急で秘密に来てくれってね。あのアルプスの主^{ママちゃん}の妹さん：

…御存じでしょう。会計をやつてらつしやる貴美子さん……いつも妾^{わたしたち}達によくして下さる。ね……あの人に頼まれたもんですからね。貴美子さんと二人で行つてみたらトテモ大變な目に会わされちやつたのよ」

「何か唄わせられたのかい」

「それが又おかしいのよ。着くと直ぐに美容院の先生みたいな人が妾を捕まえて、お湯に入れて、お垂髪^{さげ}に結わせて、気味の悪いくらい青白いお化粧をコテコテ塗られちやつたのよ」

「ハハア。スクリン用のお化粧だよ。それじゃあ……エキストラに雇われたんだね」

「ええ。そうらしいのよ。筋も何もわからないままに、美術学

校のバンドを締めさせられて、学校の教壇みたような処へ立たされて『蛍の光』を日本語で歌わせられたの……そうして三分ばかりして歌が済んじやったら監督みたいな汚ない菜葉服なっぱの人が穴の明あいたシャツポを脱いでモウ結構です。アリガトウ……って云ったきりドンドン他の場面を撮り初めるじやないの。おまけに皆みんなして妾をジロジロ見ているでしょう。貴美子さんはソコイラに居ないし、帰り道は知らないし、妾、どうしていいかわからなくなっちゃって、モウ些すこしで泣出すところだったのよ」

「馬鹿だね。エキストラなんかになるからさ」

「そうしたらね。その中うちにどこからかヒョックリ出て来た貴美子さんが、妾をモウ一度お湯に入れて、身じまいを直させている中うち

に、頼ペタに赤痣あざのある五十位の立派な紳士の人が、セツトの中で、妾に近付いて来てね。妾に名刺を差出しながら、どうも飛んだ失礼を致しました。こちらへドウゾと云つてね。妾と貴美子さんを自動車へ乗せてミカド・ホテルへ連れて行ってサンザ御馳走をして下さった上にね。京都や大阪や奈良あたりを毎日毎日、御自分の高級車で同乗して、見物させて下さったのよ。どこか貴方とお兄様とで、別荘をお建てになりたい処があつたら、御遠慮なく仰言つて下さいって……トテモお兄さまの脚本を賞めてらしたわ」

「オイオイ。お前ドウカしてやしないかい」

「イイエ。ほんとの話なのよ。そうして帰りがけにトテモ立派な

リネンの洋服と、ダイヤの指輪と、舶来の帽子とハンドバッグと、靴と、トランクと、一等寝台の切符と……」

「チョット待ってくれみいちゃん美鳥……イヨイヨおかしい。みいちゃん美鳥は僕の留守に、へつつい竈の神様へ唾液を吐きかけると何かしたんだね」

「アラ。そんならお帰りになつてから品物をお眼にかけるわ。また、そのほかにお金を千円頂いたのよ」

「タツタ三分間でかい」

「ええ。ここに持つてるわ」

「馬鹿。いい加減にしろ」

「あら。お聞きなさいったら……それから帰つて来てロツキーの支配人にお眼にかかつて、そんなお話をしたら……貴美子の奴、

飛んでもないイタズラをしやがる……つてね。真青になつて聞いてらしたわ。そうしてイキナリ私の前に手を突いて、どうもありがとう御座いました。よく帰つて来て下さいました。あの人にかかっちゃ叶いません。どうぞ、これから後^{のち}トキワ映画へお這入りになるような事がありましたも、私の方の契約だけは、お約束通りをお願い致します……つてペコペコあやまつてんの。ツイ今サツキの事よ。あたし何の事だか、わかんなくなっちゃつたわ」

「その名刺、ここに持つてんのかい」

「ええ。ここに在るわ。段原つていう人よ。あたしどこかで聞いた事があるように思うんですけど……」

「エツ……段原……それあお前アノ興行王じゃないか……東洋一

の……」

「アラツ。そうそう……あたし写真ばっかり見てたから気が付かなかつたんだわ。あの人に妾見込まれたのか知ら……」

「……ウーム。大変な事になっちゃったね」

「あたしドウしましょう」

「ところで本職のロツキー・レコードの方の成績はドウダイ……」

「それが又おかしいのよ。故郷おくにの小唄ばかり入れさせられるのよ。

故郷おくにの発音を西洋人が聞くとトテモ音楽的なんですってさあ。他の人が歌ったんじや駄目なんですって……」

「妙だね。ウツカリすると、そいつもやつぱりメード・イン・ジヤパンのお蔭かも知れないぜ」

「そうかも知れないわ。でもね、妾の唄った『島の乙女』の裏表が七千枚ずつ二度もアメリカ亜米利加へ出たそうよ。ですから妾、今月はトテモホクホクよ」

「……驚いたね。アンマリ早くエラクなり過ぎて恐しいみたいじゃないか」

「そうしてお兄様の方の成績はドウ？」

「お前とウラハラだ。何もかも滅茶滅茶さア」

「まあ。でも無事にお帰りになつてよかつたわ」

「いや。まだわからないよ。無事だかどうか」

「どうしてコンナに早くお帰りになつたの……九月の十日過に帰るって仰言つたのに……」

「どうしてってあの今月四日の新聞を見たからさ。急に心配になって来たからね」

「……アラ……妾もよ。ずいぶん心配しちゃったわ。だつてお兄様が熱海からお送りになった、今度のお芝居の脚本を弁護士の桜間さんにお渡しする前にチョット盗み読みしていたでしょう。あの脚本でアンナ大袈裟な広告をするなんて、ずいぶんヒドイと思つたわよ。呉羽さんのみのうえばなし身上話まる出しなんですもの。ポーの原作でも何でもありやしない」

「ウン。僕が心配したのもソレなんだよ。立派な広告詐欺だからね。おまけにお前、あの脚本は呉羽さんの命令で全部骨抜きだろう。今度の事件の核心に触れているところなんかコレンバカリも

ありあしない。何でもカンでも上演脚本アゲホンがパスさえすれあ、それでいいって云うんだからその通りに書いておいたのさ。それから直接に桜間弁護士に立山から長い電報を打って様子を聞いてみると、あの脚本にはロクに眼も通さないまま、呉羽さんが出発しちやったという返事だろう。弱ったよ全く。ドンナ本読みをしてドンナ稽古を付けているんだか丸きり見当が付かないんだからね。笠のオヤジの生蕃小僧問題なんかホツタラかしちやって、座員の寺本に電報を打って、この特等席を二つ取ってもらって、その返事を見てから大急ぎで帰って来たんだがね。その途中で美鳥みいちゃんにあの電報を打ったのさ」

「道理で……あたし、ちよつと意味がわからなかったわ。だって

『スグテラモトニデンワセヨ』っていうんですもの。あたしアンナ女たらしの役者の人に会わなくちやならないのかと思つてヒヤヒヤしちやつたわ」

「美鳥みいちやんは相変らずお固いんだね」

「笠さんは今、どこに居らして？」

「モウ帰つて来ている筈だがね。越中の立山に居たんだが」

「アラ。マア。あんな処へ……」

「ウン。どうやらお前の予言が当たつたらしいんだ。俺は呉羽さんから良い加減ドンキホーテ扱いにされていたらしいんだ」

「まあ……どうして……」

「どうしてつて馬鹿な話さ。笠支配人は何でもないんだよ。僕が

あの脚本を書上げると直ぐに、彼奴あいつに取りかかってやったんだ。犯人は貴様だろう……って威嚇おどかし付けてやったら、一ペンに青くなっちゃってね。色々弁解しやがるんだ。下らないアリバイなんか出しやがってね……そのうちにドウモ此奴こいつは生蕃小僧なんて恐れられるようなスゴイ人物じゃないらしいって感じがして来たんだ。しかし、それでも猫を冠かぶっているんじゃないかと思つて、色々変相して附け狙ねらつていると、彼奴あいつめ殺されるとでも思つたのか、素早く俺の変装を看破して、アツチ、コツチの温泉を逃げまわりやがるんだ。アイツは余あつ程、温泉が好きなんだね。しかも行く先々で彼奴あいつの狒ひ々ひ老ひひ爺おやし振りを見せ付けられてウンザリしちやつたよ。まったく……」

「妾も大方ソナ事でしょうと思つてたわ」

「そのうちに今月の五日になつて、立山温泉で東京の新聞のアノ
広告を見ると正直のところ、二人ともビックリしちやつたんだね。
これは大變だ。飛んでもない事が初まらなけあいと気が付く
トタンに、二人とも何となく呉羽さんに一パイ喰わされて、睨め
つこをさせられているような気がし初めたんだね。そこでドツチ
からともなく二人が寄り合つて、ザツクバランスに膝を突き合わせ
て話合つてみると、ドウモ呉羽さんの二人に云つた言葉尻が怪し
い。これはこの興行の邪魔にならないように、吾々二人を東京か
ら遠ざける計略じゃなかつたのか……呉羽さんは、こうして吾々
二人が承知しそくない無鉄砲な興行を、自分一人でやつつける

りようけん

了 簡 じゃないのか……という事になって来ると、まさかとは思いながら二人とも急に不安になって来たもんだから、大急ぎで勝手な汽車に乗って帰ることに話をきめたもんだ」

「ずいぶん鈍感ねえ。お二人とも……」

「そう云うなよ。呉羽さんの腕が凄いだよ」

「それからドウなすつて……」

「ところがサテ……帰って来てみると俳優たちは一人残らず口止めをされていると見えて、芝居の筋なんか一口も洩らさない。それから考えて楽屋裏の大道具を覗いてみると、まだハツキリはわからないが、ドウモ僕の注文した場面とは違うような道具が出て来るらしいので、イヨイヨ心配になって来た。だから藪蛇かも知

れないとは思つたがツイ今しがたの事だ。此席へ来る前に警視庁の保安課へ寄つて、興行係の片山つていう心安い警部に会つて、済まないがモウ一度あの上演本あげほんを見せてもらえまいかつて頼むとドウダイ。イキナリ僕の手をシツカリと握つて離さないじゃないか……あの筋書はどこから手に入れた……つて眼の色を変えて聞くんた。俺あギョツとしちやつたよ。まつたく……」

「……そうでしょうねえ……ホホ……」

「片山警部の話はこうなんだ……あの二通の上演脚本あげほんは八月の十五日に願ねがい人の桜間つていう弁護士から受取つて、九月の三日に許可したものだ、その九月六日……昨日きのうの朝の事だ、新聞の広告を見た大森署の司法主任の綿貫警部補つてというのがヒョッコ

リと警視庁へ遣つて来て、あの『二重心臓』の上演あげほん脚本を見せてくれと云うのだ。お安い御用だというので見せてやると、読んでいる中に綿貫警部補の顔が真青になつて来た。……濟まないが、ほんのチョットでいいからこの脚本ほんを貸してもらえまいかという中に、引つたくるようにポケットに突込んで、無我夢中みたいにオートバイ自動自転車に飛乗つて歸つた」

「……まあ怖い……」

「それから夕方になつて汗だくだくの綿貫警部補が、礼を云い云い返しに来た時の話によると大変だ……あの筋書は、この間死んだ轟九蔵氏と、犯人以外に一人も知っている筈がない。きょうが今日まで犯人に、あの筋書と同じような事実について口を割らせ

ようと思つて、どれ位、骨を折つたかわからないんだが、あの^あ上^げ本^{ほん}が手に這入つたお蔭で犯人がヤツト口を割つた。多分作者が、死んだ轟氏から秘密厳守の約束か何かで聞いていた話だろうと思つて、まだ大森署に置いてある犯人に、あの筋書を読んで聞かせて、間違つている処を訂正させた^{ついで}序に、呉羽さんの興行の話を聞かせてやったら、ドウダイ突然に顔色を変えて、その興行を差止めて下さいと怒鳴り出したもんだ。折角の私の苦心が水の泡になりますと云うんだそうだ」

「生蕃小僧がそう云うの……」

「ウン。怖い顔から涙をポロポロこぼして泣きながら、私の一生のお願いで御座います。ドウセ死刑になります^{からだ}身体に思い残す事

はありませぬが、こればかりはお情です。どうぞやドウゾお助けを願います。さもなければここで舌を嚙んで死にます……と云つて、しまいにはオデコを板張に打ち附けて、顔中を血だらけにして、キチガイのように暴れまわりながら哀願するんだそうだ」

「……まあ……何て気味の悪い……」

「……だから綿貫司法主任が、そんならその貴様の苦心というのは何だつて聞いてみたら、こればかりは御勘弁を願います。とにかくそのお芝居ばかりは、お差し止めにならないと大変な事になります。さもなければ、そのお芝居の初まる前にモウ一度天川呉羽さんに会わせて下さい。お願いですと滅めつぼう法や矢や鱈たらに駄だ々だを捏こねて聴かないのには往生した。死刑囚にはよくソ

ナ無理な事を云つて駄々^{だだ}を捏ねる者が居るそうだがね。それにしても何が何だか訳がわからないもんだから、昨日^{きのう}から大騒ぎをして僕の行衛^{ゆくえ}を探していたところだった……という、その保安課の片山警部の話なんだ」

「まあ……それからドウなすつて……」

「僕も何が何だか、わからなくなつちやつたからね。ナア二、あの脚本はやはりお察しの通り轟さんから生前に聞いた通りの事を勧善懲悪式に脚色しただけのものなんです。それじゃ今から大森署へ行つて、司法主任に会つて、よく相談して来ましょう……と云つて、逃げるように警視庁を飛び出して来たのがツイ二時間ばかり前なんだ。それから危ないと思つてここに来て、楽屋裏に隠

れていたんだ。ウツカリ捕まると、芝居が見られなくなると思ってたからね」

「まあ。それでヤツト訳がわかったわ。あのね、警察の人にはドンナ事があっても呉羽さんから聞いたって仰言っちゃ駄目よ」

「勿論さ。轟さんから直接に聞いた事にするつもりだが、それでも今夜、この芝居を見たら直ぐにも大森署へ行ってみなくちゃならん。犯人にも会わなくちゃなるまいかとも思っているんだが、とにかくこの芝居の演出を見た上でないと、カイモク方針が立たないんだ」

「どうして犯人がソナにこの芝居を怖がるのでしょうか。どうせ死刑になる覚悟なら、それより怖いものはない筈でしょうに……」

「さあ。ソナ事はむろん、わからないね」

「それにしても今夜の場内いりスゴいわね。この中に生蕃小僧の人気
が混っていると思うと、妾何だか気味が悪いわ。みんな死刑を見
に来たような顔ばかり並んでいるようで……」

「ウン。これが又、僕の心配の一つなんだ。あの広告じゃ、たし
かにインチキの誇大広告だからね。第一ポオの原作っていうのか
らして大ヨタなんだから……僕が夢にも思い付かなかった作り事
なんだからね。今夜の演出がわかったらキツト興行差止チリンチリンを喰うに
きまっている」

「アラ。今夜のお芝居も駄目になるの」

「イヤ。そんな事はないだろう。ドンナに無茶な芝居を演やったつ

て、思想や風教や政治向に関係してない限り、その場で臨席の警官から差止められるような事は、今までに一度も例がないんだからね……問題は明日の芝居あすなんだが」

「呉羽さんは今晚一晩でウント売上げようと思っていらっしやるんじゃないの。罰金覚悟で……」

「そうかも知れんね」

「そんならトテモ凄い興行師じゃないの」

「ウン。しかも、そればかりじゃないんだよ。あの女は世界ひとに類例のない偉大な女優であると同時に、劇作と犯罪批評の天才だよ。……同時に悪魔派の詩人かも知れないがね」

「あたし何だかドキドキして来たわ」

「暑いからだろう」

「イイエ。呉羽さんの天才が怖くなって来たのよ。ドンナ演出をなさるかと思つて……」

こんなヒソヒソ話が進行しているのは一階正面中央の特等席であつた。旅疲れのまま、一層、醜くくなつた職工風の江馬兆策と、青白いワンピースに、タスカンのベレー帽をチョツと傾けた、女学生みたいに初々^{ういうい}しい美鳥の姿は、世にも微笑ましいコントラストを作つていたのであつた。

呉服橋劇場内は、文字通りの殺人的大入であつた。あまりの大入りなので観客席の整理が不可能になつたらしい。外廊^{そとろう}から舞

台の直前まで身動き出来ないすしづめ鯨詰で、一階から三階までの窓を全部明あけはな放し、煽風機、通風機を総動員にしても満場の扇うちわの動きは止まらないのに、切符売場の外ではまだワアワアと押問答の聲が騒いでいるのであった。

定刻の六時に五分前になると場内から拍手の洪水が狂騰した。

その真正面の幕前の中央に、若い背の高い燕尾服の男が出て来て、うやうや恭しく観客に一礼して後のち、何事か喋しゃべり出したからであつた。それも最初の間はさながらにこうした未曾有みぞうの満員状態を面白がつているような盲目的な拍手に蔽われて、言葉がよく聞き取れなかつたが、その中うちに群集のドヨメキが静まると、やがて若々しい朗らかな声が隅々までハッキリと反響し初めた。

「あら。アレ寺本さんじゃない？」

「ウム。以前はロツキー専属のテノルで相当のところだったよ」

「いい声ね……」

「ええ。ところで早速では御座いますが、今晚のお芝居の興味の中心と申しますのは、広告にも掲載致しました通り、前の当劇場主、故、轟九蔵氏を殺害致しました犯人の、まことに古今に類例のない恐ろしい心境を脚色し、的確にして且つ、意外千萬な真犯人を指摘致しますとところに在りますので、特に、最後の一幕と申しまするのは、このたび新しい当劇場主と相成りました天川呉羽嬢の独白、独演と相成っているので御座います。ふつつかながらしかい斯界に於きまして、フランス仏蘭西のパオロ・オデロイン夫人と相並んで、

邪妖探偵劇の二明みょうじょう 星とキワメを附けられております天才女優、

天川呉羽嬢が、その最後の独白、独演において、どのような物凄い演出を行い、この二重心臓の舞台面を、どのように戦慄的なクライマクスにまで導きますかという筋書は、遺憾ながら当の本人の天川呉羽嬢以外に、作者、座員一同の誰もが一人として存じておりませぬ事を、前以てお含みまでに申上げておきます。……すなわち今晚御来場の皆様は、過般、満都の諸新聞に報道されました探偵劇王、轟氏の遭難の実情を、ひとかた一方も残らず御存じの事として演出致しますので、従ってその遭難の実情に関する説明は、勝手ながら略さして頂きます。そうしてここにはただ斯かよう様な、予期致しませぬ過分の御ひいきのために、万一プログラムを差上げ

落しました方が、おいでになりはしまいかと存じますから、そのような方々の、単なる御参考と致しまして、極めて心理的に構成されております各幕の内容を短簡に申上げさせて頂くに止めます。

第一幕……探偵劇王殺害事件の遠因——兇賊生蕃小僧と等々力久蔵親分活躍の場面。二場。

第二幕……探偵劇王殺害の動機、及、殺害の現場げんじょう。二場。

第三幕……探偵劇王の後継者、天川呉羽嬢、独白、独演。真相説明の場。一場。——以上——」

満場割れむばかりの拍手が起つたが今度は直ぐにピツタリと静まった。舞台の片隅で冷たいベルの音が断続するうち中に、幕が静かに揚り初めたからであつた。

一階から三階までの窓は全部、いつの間にか閉ざされていた。場内はたまらない薄暗さと、蒸暑さに埋もれていたが、それでも何千の人が作る氷のような好奇心が、場内一パイに冴え返っていた。せいであつたらう。扇おうぎの影一つ動かない深海の底のような静寂さが、一人一人の左右の鼓膜からシンシンと泌しみみ込んで来るのであつた。

第一幕、第一場は、静岡県見付の町外れの国道に面する草原くさはらの場面であつた。その草原の中央の平石に腰をかけている若親分、等々力久蔵の前に、金モール服オッチニの薬売人に化けた生蕃小僧こと、石栗虎太が胡座あぐらをかいて、ポケットの中からピストルを突付け、等々力久蔵の妻君の不行跡を曝露し、嘗て、或る処で、自分が等

々力の妻君から貰ったという紫水晶の簪かんざしを見せびらかしつつ、甘木柳仙宅襲撃の仕事を見逃がしてくるように頼み込む。等々力久蔵は暫く考えてから承諾の証拠に、紫水晶の簪を受取り、生蕃小僧と別れる。それから生蕃小僧が立去つて後に、妻と世話人を草原に呼んで来て、証拠の簪を突付け、厳そかに離別を申渡し、涙を払いながら決然として立去る。木立の蔭からその光景を窺っていた生蕃小僧が立出で、腕を組んだまま物凄い冷笑を浮かべて等々力久蔵の後姿を見送り、

「トテモ追出しやあしめえと思つたが……この塩梅あんばいでは愚図愚図しちやいらねえぞ」

と独りでうなずきながら立去る場面ところであつた。

続いて舞台がまわると甘木柳仙自宅の場で、等々力久蔵が柳仙夫婦から娘の三枝を借受け、それとなく三枝に左様ならを云わせ、思入れよろしくあつて退場する。そのままの場面で日が暮れると生蕃小僧が忍び入り、柳仙夫婦を惨殺し、家中うちを探しまわつて僅少の小遣錢を奪い、等々力久蔵に計られたかなと不平満々の捨すて科り白ふを残して立去るところであつた。

幕が締ると皆ホツとして囁き合つた。

「ねえお兄様。イクラか書換えてあつて？」

「ウン。それが不思議なんだ。この幕は大体から見て僕が書下した通りなんだ。あんな大道具をどこに蔵しまつて在つたんだらう……ただ柳仙夫婦の殺されの場がすこし違ふようだね。あんな風に老

人の柳仙が頭からダラダラ血を流して拝むところなんぞはなかったよ。キツト睨まれると思ったからカゲにしておいたんだがね」

「警察の人は来ているんでしょうか」

「来ていても今晚は何も云わないのが不文律みたいになっているから大丈夫だよ。その代り明日あすになるとキツト差止めるとか何とか威かして来るにきまつているんだ。もつとも呉羽さんは、それを覚悟の前で演やつてるのかも知れないがね」

「……でも轟さんと呉羽さんの前身だけは今の幕で想像が付くワケね」

「ナアニ。みんな芝居だと思って見ているんだから、そんな余計な想像なんかしないだろう」

「そうかしら……でもポオの原作なんて誰も思やしないわよ。あれじゃ……」

「フフフ。黙ってる。幕が開くから……オヤア……これあ西洋室^まだ……おれア日本室^まにしといた筈だが……」

「……シツシツ……」

第二幕の第一場は大森の天川呉羽嬢邸内、轟九蔵氏自室の場面であつた。部屋の構造から品物の配置、主人轟九蔵氏の扮装に到るまで、すべて実物の通りで、窓の外に咲き誇っている満開の桜までも、寸分違わない枝ぶりにあしらつてある。

その東の窓際の寝椅子に、着流しの轟九蔵氏が長くなつている足先の処に、美術学校の制服を着た、イガ栗頭の江馬兆策に扮し

た俳優が腰をかけている。その前に音楽学校のバンドを締めた美鳥ソツクリの少女が姿勢正しく立って、美鳥のレコードを蔭歌にして独唱をしている体^{てい}。それを轟氏が、如何にも幸福そうに眼を細くして聞いている。

「うらわかき吾が望み 青々と晴れ渡り

かがやかに雲流る 大空よああ大空よ」

「うらわかき吾が思い はてしなく澄み渡り

すずろかに風流る 大空よああ大空よ」

「ウム。なかなか立派な声になった。学校というものは有難いも

のだ」

兄^{きょうだい}妹

同時に頭を下げる。

「ありがとうございます」

「ああ。御苦労だった、お蔭でいい心持になった……ウム。それからなあ。きようは久し振りに娘の三枝と一所に夕食を喰べるのじゃから、お前たちも来て一所に喰べてくれ」

二人顔を見合わせて喜ぶ。

「ハハハ。嬉しいか」

「ありがとうございます」

「おじさま。ありがとう」

「うむ。なかなか言葉が上手になったな。もう日本人と変らんわい。ハハハ。どうだい。お前たちは日本と朝鮮とドツチが好きか

ね」

「僕日本の方が好きです」

「何故日本が好きかね」

「朝鮮には先生みたいに外国人を可愛がる人が居りません」

「ハハハ。外国人はよかつたな。美鳥はどうだい」

「あたし豆満江とまんこうがもう一ペン見とう御座いますわ」

「うむうむ。その気持はわかるよ。あの時分はお前達と雪の中で、
ずいぶん苦勞したからなあ」

「おじ様が毎日鮭さけを捕えて来て、あたし達に喰べさして下さいま
したわね」

「アハハハ。ところでお前たちは、あれから毎日毎日三枝と兄きょう
妹まいみたようにして暮して来ているが、これから後のちも、このおじ

さんに万一の事があつた時に、今までの通りに仲よくして暮して行けるかね。参考のために聞いておきたいが……」

「出来ません。僕、呉羽さん大好きです」

「美鳥はどうだい」

「わたくし……好きです……トテモ。ですけど……何だか怖こおう御座いますわ」

「ナニ怖い。どうして……」

美鳥、恥かし気にしなだれる。轟氏もキマリ悪るそうに顔を撫でて笑う。

「怖いことなんかチツトモないんだよ。アレは負けん気が強いし、小さい時から世の中のウラばかり見て来とるから、あんな風にな

ったんだよ。ホントは実に涙もろい、純情の強い人間なんだよ」
「呉羽さんはエライ女ひとですよ。何でも御存じですからね。悪魔派の
新体詩だの、未来派の絵の批評が出来るんだから僕、驚いちゃ
った」

「ウム。わしの感化を受けとるかも知れん。わしも元来は平凡な、
涙もろい人間と思うが、あんまり早くエライ人間になろうと思う
て、自分の性格を裏切った人生の逆コースを取って来たために、
物の見え方や聞こえ方が、普通の人間と丸で違ってしもうた。悪
魔のする事が好きで好きで叶かなわん性格になつてしもうた。ハハハ。
怖がらんでもええぞ美鳥……お前たち 兄きょうだい 妹 に対しては俺はチ
ツトモ悪魔じゃない。平凡な平凡な涙もろい人間だ……その平凡

な平凡な人間に時々立帰ってホツと一息したいために、お前達を養っているのだ……イヤ詰まらん事を云うた。それじゃ又、晩に來なさい。夕飯の準備が出来たら女中を迎えに遣るから……」

「おじさま……さようなら……」

「先生……さようなら……」

「ああ。さようなら……」

二人が退場すると轟氏呼よびりん鈴を押し、這入つて來た女中に三枝を呼んで来るように命じ、そのまま寢椅子に長くなる。

大きな桃割ももわれ。真赤な振袖。金糸づくめの帯を立矢たてやの字に結ん

だ呉羽がイソイソと登場する。

「あら……お父様。お呼びになつたの」

「……うむ。こつちへお出で……」

「……嬉しい。又、どこかのお芝居へ連れてつて下さるの」

と呉羽嬢が甘たれかかるのを抱きあげて身を起した轟氏は立上つて、入口の扉ドアに鍵おろを卸し、窓のカアテンとぎを閉して異様に笑いながら寝椅子に帰り、呉羽の身体からだを抱き上げる。

「きようは、私の方からお前まへにお願いがあるんだよ」

と少し真面目に帰りながら、二人の身の上話を初め、前の幕の通りの事を簡略に物語り、二人が真実の親子でない事を明らかにする。

その一言一句に肩をすぼめ、眼を閉じておび魘えながらも、不思議なほど冷然と聞いていた呉羽は、やがて冷やかな黒い瞳をあげて

微笑する。

「それで妾にお願いって仰言るのはドンナ事なの……」

轟氏は忽ちハラハラと涙を流し、熱誠を籠めた態度で、呉羽の両手を握る。

「……オ……俺は、お前を一人前に育て上げてから、両親の讐仇かたきを討たせようと思つて、そればかりを楽しみの一本槍にして、今日まで生きて来たんだ」

「……まあ……そんな事……どうでもよくつてよ。今までの通りに可愛がつて下されば、あたしはそれでいいのよ」

「……ウウ……そ……それは……その通りだ。……と……ところ
がこの頃になつて……俺は……俺に魔がさして来たんだ。もちろん

ん最初の目的は決して……決して忘れやしない。必ず……必ず貫徹させて見せる。生蕃小僧は、お前の一生涯の讐敵かたきだから、この間お前が頼んだように、誰にもわからない処で、一番恐ろしい……一番気持のいい方法で讐敵かたきを取らしてやる決心をして、現在、極秘密の中に、この家の地下室でグングン準備を進めているところだが……」

「……アラツ……ホント……」

「ホントウだとも。もつとも二……二三年ぐらいはかかる見込だがね。骨が折れるから……」

「嬉しい。楽しみにして待っていますわ」

「……と……と……ところがだ。この頃になったら、その上に……も……」

……もう一つの別の目的が……オ……俺の心に巢喰い初めたのだ。
そそ……その目的を押付けようとすればする程……その思いが募
つて……いやま彌増して来て……もうもう一日も我慢が……で……出来
なくなつて来たんだ」

「まあ。そのモウ一つの目的つてドンナ事？」

「オ……俺は……お前をホントウに俺のものにしたくなつたのだ。
ああ……」

轟氏は涙を滝のように流し、両手を顔に当てる。呉羽は本能的
に飛退とびのいて、傍そばの椅子を小楯に取り冷やかに笑う。

「まあ。あなた馬鹿ね。あたし今でも貴方のものじゃないの。こ
の上に妾にどうしろつて仰言るの……」

「ウ……嘘でもいいから……オ……俺の妻になつたつもりで……俺に仕えてくれ」

「あら。厭な人。あなた妾を恋して、いらつしやるのね」

轟氏は寝椅子からズルズルと^{すべ}下り落ちてペツタリと両手を床に支える。乞食のようにペコペコと頭を下げる。

「そ……そうなんだ。タ……助けると思つてこの俺の思いを……」
呉羽、椅子の背中に掴まつたまま、仕方なさそうに身を^そ反らして高笑いする。

「ホホホホホホ可笑^{おか}しな方ね。ホホホホホホ……」

その笑い声の中に電燈が消えて、場内が真暗になつても、笑い声は依然として或は妖艶に、或は奇怪に、又は神秘的にそうして

忽ちクスグツタそうに満場を轟惑こわくしいしい引き続いている。

そのうちにソノ笑い声が次第に淋しそうに、悲しそうに遠退とおのいて行つて、やがてフツツリと切れるトタンに舞台がパツと明るくなり、第二幕の第二場となる。

呉羽の姿は見えず。黒っぽいモーニングコートに縞しまズボン白胴チヨツキ衣の轟氏がタダ独りで、事務机の前の廻転椅子に腰をかけて、

金きんぐち口煙草を吹かしながら

一時二十五分を示している正面の大時計

計を見ている。左側のカーテンを引いた窓硝子ガラスの外に電光がしき

りに閃めくと、窓の前の桜がスツカリ青葉になつて見えるのが見え

る。その電光の前に覆面の生蕃小僧が現われコツコツと窓硝子ガラスを

たたく。

轟氏が立つて行って開けてやると両足を棒のように卷いた生蕃小僧が、手袋を穿めた片手にピストルを持って這入つて来る。

「ハハハ。よく約束を守つたな」

轟氏は用意の小切手を生蕃小僧に与える。

「この次は真昼間、玄関から堂々と這入つて来い。夜は却^{かえ}つて迷惑だ」

「卑怯な事をするんじやあんめえな」

「俺も轟九蔵だ。貴様はモウ暫く放し飼いにしとく必要があるんだ。今日は特別だが、これから毎月五百円宛^{ずつ}呉れてやる。些くとも二三年は大丈夫と思え」

「そうしていつになつたら俺を片付けようというんだな」

「それはまだわからん。貴様の頭から石油をブツ掛けて、火を放けて、狂い死しにさせる設備がチャントこの家の地下室に出来かけているんだ。俺の新発明の見世物だがね……グラン・ギニョールの上手を行く興行だ。その第一回の開業式に貴様を使つてやるつもりだが……」

「そいつは有り難い思い付きだね。しかし断つておくが、俺はいつでも真しん打うちだよ。前座は貴様か、貴様の娘でなくちや御免蒙るよ」

「それもよかろう。しかしまだ見物人が居らん。一人頭千円以上取れる会員が、少くとも二三十人は集まらなくちや、今まで貴様にかけて経費の算盤そろばんが取れんからな。とにかく油断するなよ」

「ハハハ。それはこつちから云う文句だ。貴様が金を持っている限り、俺は貴様を生かしておく必要があるんだ。俺はまだ自分のドルばこ弗箱こに手を挟まれる程、もうろく耄碌しちやいねえんだからな……ハハんだ」

「文句を云わずにサツサと帰れ。俺は睡いんだ」

轟氏、生蕃小僧が出て行つた窓をピツタリと閉め、床の上の足跡を見まわし、葉巻に火を付けながら何か考え考え歩きまわっている中に、うち微かな電鈴の音を聞き付け、

「ハテナ。電話かな」

とつぶやきながら廊下へ出て行く。入れ代つて大きな白い手柄の丸鬘ひすいに翡翠かんざしの簪、赤い長襦袢、黒っぽい薄物の振袖、銀糸づく

めの丸帯、白足袋しろたび、フェルト草履ぞうりという異妖な姿の呉羽が、左手の扉ドアから登場し、奇怪な足跡に眼を付け、一つ一つに窓際まで見送って引返し、机の上の小切手帳を覗き込んで何やら首肯うなずき、唇をキツと噛んで部屋の中をジロジロ見まわしながら考えている中に突然、ポンと手を打合わせてニッコリ笑い、残忍な眼付で入口の扉ドアを振返りつつ、机の上の短剣型ナイフを取上げて素早く帯の間に隠すところへ、電話をすました轟氏が帰って来て悠々と扉ドアを閉め、立っている呉羽と向い合つてギョツとする。

「ナ……何だ……何だ今頃……何か用か……」

「ハイ。きよう……昼間にお問い合わせしました事の、御返事を聞かして頂きに参りましたの」

「美鳥と結婚したいという話か」

「ええ……貴方の眼から御覧になったら、飼って在る小鳥が、籠の中から飛出したがつている位の、詰まらないお話かも知れませんけども……妾……あたしこの頃、急にそうして、今までの妾の間違つた生活を清算したくてたまらなくなりましたの」

「ならん……そんな馬鹿な事は……俺の気持ちも知らないで……」

「ホホ。お憤りいきどおになつたのね。ホホ。それあ今日までの永い間の

貴方のお志は何度も申します通り、よくわかつておりますわ。……ですけど……あたしだって血の通つている人間で御座いますからね。最初から貴方のお人形さんに生れ付いている犬猫とは違いますからね。もうもう今までのような間違つた、不自然な可愛が

られ方には飽き飽きしてしまいましたわ」

「……カカ……勝手にしろ。馬鹿。俺のお蔭で生きているのが解らんか」

「どうしても、いけないって仰言るの……」

「ナランと云うたらナラン……」

と云い捨てて廻転椅子に腰をかけ、事務机の上を片付け初める。

「オヤ。紙小刀かみきりが無い。鞘さやはここに在るんだが……お前知らんか

……」

「存じませんわ。ソナなもの……」

「彼品あれはトレード製の極上品なんだ。解剖刀メスよりも切れるんだか

ら無くなると危険あぶないんだ。鞘さやに納めとかなくちや……」

「よござんすわ。あたし、どうしても美鳥さんと結婚してみせるわ。キツトこの家うちで美鳥さんに子守唄ララバイを唄わせて見せるわ」

「……………」

「何と仰言つたつて美鳥さんを逐出おいださせるような残酷な事は、断じて、断じてさせないわ」

「……勝手にしろツ。コノ出来損ないの……カカ片輪かたわもの者の……
ババ馬鹿野郎ツ……」

「ネエ。いいでしょう……ねえ。ねえエ……あたしだつてモウ……
…年頃なんですものオ……」

と云ううちに轟氏の背後から廻転椅子ごしに甘えかかるようにして頬をスリ寄せながら、帯の間から短剣を取出し、白い腕の蔭

に隠して轟氏の胸に近付け、不意に両手で握って力任せにグツと刺す。

「ガツ……ナ何を……するツ……ガアツ……ムムムム……」

その時に硝子窓ガラスの外から、最前の生蕃小僧が覆面の顔を覗かせる。電光イヨイヨ烈しくなる。

呉羽は虚空を掴んだままの轟氏の両手を避けながら、刺さっている刃物の十字形のつかを、鼻紙で用心深く拭い上げ、事務机の一番下の曳出ひきだしから生蕃小僧の脅迫状を探し出して、その中の一枚うちを元に返しながら懐中し、曳出ひきだしの表面に残っている指紋に呼吸いきを吐きかけ吐きかけ念入りに鼻紙で拭き取っている中に、窓硝子ガラスをコツコツとたたく音を聞付け、ハツとして振返る。

窓の外の生蕃小僧、覆面を除き、白い歯を露わしつつ眼を細くして笑い、ここを開けよという風に手真似をする。呉羽はわななく手で曳出しひきだしてからピストルを取出し、襦袢の袖に包み、引金に指をかけながら近付き、やはり襦袢の袖でネジを捻じって窓を開ける。生蕃小僧は外に立ったまま依然として笑いながら声をひそめる。

「呉羽さん。相変わらず綺麗ですなあ」

「……………」

「私あつしやこれで貴女あなたの生命いのちがけのファンなんだよ。ドンナヤバに危い思あないをして、貴女あなたの芝居あなばかりは一度も欠かした事はないし、ブロマイドだって千枚以上蓄ためているんだぜ。ハハ」

「……………」

「しかし、心配しなくともいいんだよ。どうもしやせんから……
あつしはねえ……」

「……………」

「あつしはね。モウ御存じかも知れんが、貴女あなたや、その轟さんと
は相当、古いおなじみなんだ。あつしを手先に使つて、貴女の御
両親を殺させた、その轟九蔵つて悪党に古い怨恨うらみがあるんでね。
タツタ今二千円をイタブツて出て行つたばかりのところなんだ
が……どうも彼奴あいつの呉れっぷりが美事なんでね。万一、警察さつへ密さ
告あしやしめえかと思つて、途中の自動電話から彼奴あいつを呼出して、も
う一度用事が出来たからと云つておいて、引返してみたら、約束

しておいた玄関の扉とが開かない。おかしいなと思つて、ここへ来て様子を見ているうちに、何もかも見てしまつたんだがね……へへ……何も心配しなくなつていいんだよ。呉羽さん。ちようど、あつしが思つていた通りの事をアナタが遣つてくんなすつたんだから、お礼を云いてえくれえのもんだ。お蔭であつしも奇麗サツパリと思ひ残すことがなくなりましたよ。へへへ……どうも、ありがとうがんです」

「……………」

「へへへ。だから万一あつしが検挙あげられたつて、決して今夜の事あ口を割りやしません。アンタのしなすつた事は、何もかもアツシが背負しょつて上げます。ドウセ首が百在あつたつて足りねえ身体からだな

んだからね。ハハハ」

「……………」

呉羽はピストルを取落しヨロヨロと後あとじさ退りして踏止まり、両袖を胸に抱き締めて一心に生蕃小僧の顔を見詰める。

「ハハハ。その代りにねお嬢さん。万が一にも、あつしが無事にふけおお逃走させたなら、どこかで、タツタ一度でもいいから、あつしの心を聞いて下さいよ……ね……」

「……………」

生蕃小僧はうなだれたまま神に祈るようにつぶやく。遠雷の音……………。

「しかし、それあ、あつしみてえな人間にとつちや、及びもねえ

事かも知れねえ。だから万一御用を喰つちまえあ、貴女あなたの罪を背負つて行くのがタツタ一つの楽しみでさ。へへへ。あつしみてえな人間の心あなたあ貴女あなたみてえな女ひとでなくちやあ理解わかつてもれえねえかな

「……………」

生蕃小僧はチョツト涙を拭いてニヤニヤと笑つた。

「へへへ。それからね。チツト未練がましい長文句になつて済まねえが、明日あすの朝は、せめてアツシにお線香でも上げるつもりで、出来るだけ朝寝しておくんなさいね。その轟九蔵の死骸がアンマリ早く見付かつちや困るんだ。銀行へ行つてお金を受取らなくちやなりませんからね。いいかね。お頼ん申しますよ」

と云う中^{うち}に姿は闇の中に消えて、声だけが朗らかに残った。

「……オットット……その窓は、そのまんま開け放しといた方がいいね。閉め切つとくと、オマハンの首に縄がかかるんだ。ハハハハハ……」

やがてバラバラと雨の音……烈しい電光……。

あとを見送つた呉羽はホツとため息した。そうしてニツコリとあざみ笑いをしいしい入口の扉^{ドア}の把^{ハンドル}手を、袖口でシツカリと拭い上げてから、舞台正面、中央の青ずんだフットライトの前まで来ると、大きな眼をパチパチさせてビツクリしたように場内一面の観衆を見まわした。……すると……その背後の天井裏から新調らしい、真白い緞子^{どんす}の幕がスルスルと降りて来て、一切の舞台面

を霧のように蔽い隠した。

「ヒヒヒヒヒヒヒヒホホホホホホハハハハ……」

底の抜けるほど朗らかな、明るい呉羽の笑い声が、満場におののき渡った。

トタンに場内の片隅から、低いけれどもケタタマシイ、慌てた声が出た。

「芝居だよ芝居だよ。タカが芝居じゃないか。ビクビクするな。シツカリしろ……シツカリして舞台を……アツ。いけねえいけねえ。脳貧血脳貧血。チョット誰か……来て……」

そうした若い男の声が、一層モノスゴク場内を引締めた。

しかしその声の方向を振り向いて見る者すら居なかった。場内

はさながらに数千の人間を詰めた巨大な花氷のように冷たく凝固してしまっていた。その中に呉羽うちの笑い声が今一度華やかに、誇りに閃めき透り初めた。

「ホホホホハハハハハハ……。いかがで御座います皆様……。おわかりになりました？ 轟九蔵を殺したのは私だったので御座いますよ。皆様からこれほどの身に余る御引立を受けまして、轟九蔵からあれほどまで可愛がられておりました私だったので御座いますよ。ホホホハハハハハ……。」

……その殺しましたホントの理由と申しますのは……。どうぞ恐れ入りますが今晚のお芝居を、第一幕から今一度繰り返して御考え下さいまし。当劇場の探偵劇を御ひいき下さいます皆様は、す

ぐに御察し下さることと存じます。

……私は、父の甘木柳仙が老年になつてから生まれました長男
だつたので御座います。そうして只今も取つて十九歳に相成りま
す甘木三枝と申す男の子なので御座います。ハハハハホホホホ
……私の実父の柳仙は旧弊な人間で御座いましたので、老人の一
人子は、その子供の性を反対に取扱つて育てますと……女の児こは
男の児この通りに……又男の児こは女の児この通りにして育てますと、
無事に成長させる事が出来る……とよくソナ事を申します迷信
から、わざわざ私を女の児こという事にして三枝という名前を付け
て役場に届けまして、それから何もかも女の児ことして育てられな
がら、だんだんと大きくなってまいりますうちに、私自身でも、

自分が男だか、女だかわからない位、声から姿までも……心までも女らしくなつてしまつたので御座います。只今、こう申しております中にも皆様はまだ私を一人前の女と信じ切つておいでになる方が、かなり大勢おいでになる事で御座いましょう。ホホホホホハハハハハハハ……。

……ところがツイこの頃になりました、そうした女性的な習慣に埋もれておりました私の心が、いつの間にか男性として眼醒めに初めたので御座います。そうして今晚のお芝居で、お眼にかけました通りに、あの轟九蔵の執拗い変態的の愛がたまらなく厭になりました、あの純真なソプラノ歌手の美鳥さんと一所になりたいたいばかりに、止むに止まれない切ない気持から、あのような無鉄

砲な事を仕出かしまして、満都の皆様方に、お詫の致しようもないお心づかいを、おさせ申したので御座います。そうしてその上にも因果な事には、女としての私に恋焦こがれておりましたあの兇悪無残の殺人鬼、生蕃小僧が、女性としての私を恋する余りに、それこそ生命いのちがけで私の罪悪をカバーしてくれましたお蔭で、やつと今日まで娑婆しゃばに生き永らえまして、おなつかしい皆様に今一度、斯か様な舞台姿で、お目にかかる事が出来たので御座います」

「芝居だ芝居だ」

「スゴイスゴイ……」

「ああ……たまらねえ」

満場の人々のタメ息が一瞬間笹原を渡る風のように渦巻きドヨ

めいて直ぐに又ピツタリと静まった。

「……けれども皆様お聞き下さいまし。私は、こうして大罪を犯してしましますと、今一度、夢から醒めたような気持になつてしまいました。静かに自分自身を振り返る事が出来るようになりしました。男性として眼醒めました私は、今度は男性としての良心に眼醒め初めたので御座います。私のような鬼けだものとも、又は蛇だか鳥だかわかりませぬような性格の人間が、あの女神のように清らかな美鳥さんに恋をするのは間違つてゐる。私のこの血腥い呼吸が、ミジンも曇りのないアノ美鳥さんの顔にかかつてはいけない。私のこの爛ただれ腐つた指が、あの美鳥さんの清浄無垢おの肉からだにチヨツトでも触れるような事があつてはならぬということ

を深く深く思い知りましたので、そうした私の心持を、ホンノ少しばかりでもいい、美鳥さんに理解わかつて頂きたいばかりに、このお芝居を思い付いたので御座います。……で御座いますからこのお芝居の終り次第に、私の持つておりますものの全部を、心ばかりの贖はなむけとして、私の顧問を通じて美鳥さんに受取つて頂く準備がモウちゃんとして出来ているので御座います。……美鳥さんは私のこうした気持をキツト受け入れて下さる事と信じます。そうしてあの可哀そうな殺人鬼、生蕃小僧の罪名が、すこしでも軽くなるように、心から世話して下さいるに違いないと思います」

「シバイダ……シバイダ……」

「ホホホホ……まったくで御座いますわねえ。この世は何もかも

お芝居で御座いますわねえ……。ですから私も、こうして最後のお芝居を打たして頂きまして、私の一生涯を貫いておりますこのノンセンスの上もない怪奇探偵、邪妖劇の幕を閉じさして頂くので御座います。……生蕃小僧と手に手を取って絞首台へ登るような作りごとはモウどうしても出来なくなつたからで御座います。私は、私の真実にだけ生きて行きたくなつたからで御座います。

……おなつかしい皆様……お名残り惜しゆう御座いますが天川呉羽は、もうコレツキリ永久に皆様の前から消失きえうせなくてはなりません。

……では皆様……さようなら……御機嫌よう御過し下さいませ」
低く低く頭を下げた天川呉羽の、大きな水々しい前髪の蔭から

玉のような涙がハラハラと滴り落ちるのが、フットライトに閃めいて見えた。

「シバイダ……シバイダ……」

「……バ馬鹿ツ……芝居じゃないゾツ……芝居じゃないんだぞツ……ト止めろツ……」

突然に叫び出した浴衣がけの若い男が一人、最前列の左側の見物席から、高い舞台の板張に飛付いて匍い上ろう匍い上ろうと藻掻^がき初めた。それを冷然と流し目に見た天川呉羽は、慌てず騒^ががず、内^{うちふところ}懐^{こころ}に手を入れて、キラリと光るニツケルメツキ五連発の旧式ピストルを取出した。自分の白い富士額の中央に押当ててシツカリと眼を閉じた……と思う中^{うち}に、

……轟然一発……。

美しい半面をサツト真紅に染めた呉羽は、ニツコリと笑って両手を合わせた。背後の白幕に虹のような血飛沫ちしぶきを残しながら、フツトライトの前にヒレ伏した。

トタンにヤツト見物席から匍匐はづ上った浴衣がけの男が、飛び上るように呉羽の身体からだに取付いた。綺麗に分けた髪を振乱したまま正面に向って悲壮な声で叫んだ。

「ダ誰か来てくれツ。芝居じゃないゾツ」

それは大森署の文月巡査であった。その中うちに幕の横や下から笠支配人を先に立てた四五人が馳寄はせよつて来て、呉羽の身体からだを無造作に、向って左の方へ抱え上げて行つた。

冷やかなベルの音に連れて、天井裏から真紅の本幕が静々と降り初めた。その幕の中央には眼も眩ゆい黄金色の巨大な金文字で「天川呉羽嬢へ」「段原万平」と刺繍してあった。

万雷の落ちるような大拍手、大喝采が場内を狂い渦巻いた。ビュービューと熱狂的な指笛を鳴らす者さえ居た。

そうして先を争う蛆うじむし虫の大群のようにゾロゾロウジャウジャと入口の方向へ雪なだ顔れ初めた。

「シバイダ……シバイダ……」

「ドコマデモ徹底的な写実劇だ」

「スゴイスゴイ深刻劇だ」

「……バカ……そんなのないよ。怪奇心理劇てんだよコレア……」

「ああスゴかった」

「ステキだった」

「あすこまで行こうたあ思わなかった」

そうして又、思い出したように方々から振返つて拍手の嵐を送るのであつた。

しかし、その大勢の中にタツタ二人だけ、拍手しない者が居た。それは正面、特等席の中央に居る江馬 兄きょうだい 妹いであつた。

江馬兄妹はそこに作り附けられている人形使節か何ぞのように、無表情な両眼を一パイに見開いて、幕が降りてしまった舞台の中央を凝視していた。満場の人影が残らず消え失せてしまった後までもまだ揃つて頬を硬ばらせたまま瞬まばたき一つせず、身動き一つしな

いまま一心に真紅の幕を凝視していた。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年10月22日第1刷発行

初出：「オール読物」

1935（昭和10）年9、10、11月号

※冒頭の罫囲みには、底本では波罫が用いられています。

※疑問点の確認に当たっては、「夢野久作全集5」三二書房、1975（昭和50）年6月15日第1版第4刷発行を参照しました。

入力：柴田卓治

校正：kazuish

2001年7月24日公開

2012年10月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二重心臓

夢野久作

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>